

Title	サン・ シモンの歴史哲学と人類の科学
Sub Title	
Author	小泉, 順三
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1929
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.23, No.2 (1929. 2) ,p.256(80)- 322(146)
JaLC DOI	10.14991/001.19290201-0080
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19290201-0080

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

サン・シモンの歴史哲學と人類の科學

小泉 順 三

一 序説

二 歴史哲學の基礎概念

三 地球創成からエヂプト人迄

四 エヂプト人から現代迄

五 人類の科學とその完成

六 人類の科學完成の結果

七 科學から政治へ

八 結論

サン・シモンの科學思想を知るためには、ルトデルンとの争及貧困との争の結晶である重病から再生した彼が一八一三年に書いた「人類科學に關する覺書」と「萬有引力に關する研究」及「それより前二八〇八年に書いた「十九世紀科學研究序論」の三つによらねばならぬ。

「十九世紀科學研究序論」は何故に必要であるかと云ふに、サン・シモンがコンドルセーの史觀に置換した新思想は、既にこの著に於て充分の萌芽を見せてゐるからである。この萌芽は「新百科全書草稿」及「ルトデルンへの書翰」によつて漸次發展し、一八一三年の「人類科學に關する覺書」に至つて完成された。

「萬有引力の研究」は「人類科學に關する覺書」及其後に先行する彼の科學的著述の要約である。しかも、その要約は甚だ僅の頁數の中に收められてゐる。この僅かな頁數は彼が書いた最も美しいものであり、彼の根本思想は何所に於ても、これ以上明確には決して話されて居らぬ。「註」その内容は、三つの覺書と總決論、及、歐洲の學者への書翰から成つてゐる。この書翰はこの著の更に短い要約の如きものである。

この著は成程、選集の序に述べてある如く、サン・シモンの根本思想の最も明確簡單な要約ではあるが、たゞこの著のみよむときは、あまり簡明に過ぎで反つて正しい彼の意見を見失ふ心配がある。我々は先づ「人類科學の覺書」を一讀した後、に於て初めて「萬有引力に關する研究」に於ける明確な要約の價値を發見しうるのである。

私は、その意味に於て「萬有引力に關する研究」は要約に過ぎない。「人類科學に關する覺書」に何等特別の重要性を附加したものではないと斷定する。そして、寧ろ他の點に於て、この著のより有價値な存在を發見しよう。

それは、この著が、サン・シモンの科學思想を完成した後、に政治問題へ轉換しようとする態度を我々に指示してゐるといふ事にある。

著者の著し、この著を以つてサン・シモンは彼の思想の頂點に立つたのである。

私はかゝる理由によつて、主として「人類科學に關する覺書」を中心にして彼の科學思想及政治問題の端緒を探らうと思ふ。

「人類科學に關する覺書」は印刷の上から三冊になつてゐる。しかし、思想内容から云へばこれと異つた二部分に岐れてゐる。第一篇では個人生理學を説き、第二篇では人類史を説いてゐる。勿論、兩者は連絡してゐるものであるが、第一篇の個人生理學に關する方面では、彼は當時の人々の生理學に關する文献について、詳細な意見を缺いてゐる。従つて、大して注意する價值を持たない。之に反して、第三篇は、遙かに興味のある人類の史的発展の草案をなしてゐる。人智の發展を中心とするや觀念史觀がそれである。

我々は、彼の歴史哲學を彼の獨創的天才の産物と見る事は許されてゐない。我々は、彼等がその開拓者としての自覺を有すると看せざるに拘らず、實證哲學の先驅者として、ダランベール、ボルテール、モンテスキエ、ルソー、及コンドルセル等を數える事が出来る。

若き日のチュールゴトは、進歩の觀念を歴史の有機的原理とした。歴史は衰亡と復活の動搖を受けながら常に完成へ進んで行く人類の生活記録であると彼は見た。

コンドルセルは、社會改造家の熱情のために正しい論定をなし得なかつたが、彼の見地も、チュールゴトと等しく、近世の社會學的方法をとつて居つた。人智の完成を信じ、未來の進路を科學的に分析された過去の事實から抽出しやうと試みた。政治を、人類の進歩を豫測し、之れを指導し、促進せしむる科學であるかと考へた(註二)。

次の時代には、カバニス、トランシー(Desaut de Tracy)及、チャーロー(Thurot)等の一群によつてこの實證論は開拓を繼續された。

かくの如く、實證哲學には、サン・シモンの學界出現以前に充分の土臺が築かれて居つた。そして、又、ラ・グランジヤやモンテスキエ其他多くの科學者學者との交遊の間に、サン・シモンの哲學觀念は、或點まで固められて居つた。彼とブルダン博士との交渉に於て見ても、彼の實證論的世界觀の基調は、彼の創案でなくして繼承したもの以外ならぬ事が判明してゐる。

然し、以上の考察を考慮に入れても尙、彼の地位は重大なものである。彼の歴史哲學の價值は、時代を劃する程のものとも云ふことが出来やう。

サン・シモンは、現在と未來の本質を闡明せんがために、歴史を數個の文化期に分つた。そして、歴史生活の構成事實は、社會心理的に統一されてゐる事を明白にして、コムトの學說體系に到る基礎を固めた(註三)。

彼は、近世をば、中世とは全く異つた過渡期と認め、本期にては、巍然たる教會の建物換言すれば、中世の統制權力が崩壊して、智識上の分離混亂が起つてゐると觀破した。

又、中世と近代の争に於て、形而上學は、批判の役目しか承つてゐなかつた事を認めた。革命は、かつて決定的に統制力を失つた現在の社會制度は、然らば、形而上學的考察者の云ふが如く、その無政府状態のままに存續すべきか、或は亦、崩壊せる宗教的權威が、起つて再び新支配者となるか

さによつて救はれるのであらうか？ サン・シモンは、中世思想に基づく諸關係への復古を思ふ法王全權論的反動派に反對すると共に、政治的經濟的自由を以て社會を救済しやうとする形而上的自由主義的傾向にも賛成しなかつた。彼は、當時只一人で、その廣い歴史眼によつて、時代の近代的統制原理を、歴史そのものの中から求めたのである。

サン・シモン以前に於ける、實證學派の諸概念の史的考察は、頗る興味深く且重要であるが、本稿では、それが直接目的でないから、前述の如き二三行の略述に止めて、サン・シモンの歴史哲學に移ることにする。

註一 Saint-Simon, Œuvres choisies vol. I, intro. XLIII.

註二 加田哲二教授著、近世社會學成立史、第三章參照。

註三 サン・シモンは、ユトの三階梯に似た人智史の三大別を採用してゐる。 1. Époque des travaux préliminaires,

2. Époque de l'organisation du système conjunctural, 3. Époque du système positif (ibid. vol. II, p. 210).

二

サン・シモンは、自然現象たるを精神現象たるを問はず、一切の現象の統一と云ふ事から出發して、天文學や化學等の他の科學が有してゐる様な性質を歴史に附與しやうとした。これがためには、歴史的な生活の根本要素を檢覈する要がある。系統なく、無秩序に置かれた觀察を、一定の合理的基礎の上に科學的に統制しうる要素を發見する必要がある。

然るにサン・シモンによると、從來の歴史はすべて、かゝる精神を以つて書かれてゐなかつた。従つて、諸現象の紛亂の中から方向の定つた原動力を抽出し得なかつた。無秩序に掻き集めた事實の蒐集丈で満足して居つた。世人は、主として、第二次的要素、換言すれば、政治的軍事的事件の考察のみで満足し、歴史は取りも直さず「國王の日課表だ」と云つてもいい位であつた(註一)。然もこの日課表たるや、甚だ間諜つた統治の記録である所から判斷すると、かくの如き歴史の觀察方法が國王を害する事の多かつた事が推定される。

加之、日常の出來事を主に基礎として、將來を推定するとすれば、そこから誤つた推理の生ずるのは當然である。何んとなれば、日常の出來事なるものは、將來を推定するに對して、吾人が所有しうる最も不確實な基礎であるから。しかも、吾人にして高い見地を保持しない場合には、我々は、往々にして、かゝる日常の瑣細な事件によつて自分の意見を構成する傾向を有するものである(註二)。

故に、さしあたつて緊急な事は、歴史の改造といふ事である。社會的事件の心核を抽出して、それに基礎を置く社會的現象の特質を抽出する様に、策を講じなければならぬ。基礎原理によつて諸現象を因果關係的に説明すると云ふ高邁な見地に進まねばならぬ。

サン・シモンによると、この原理は知識であつた。歴史獨特の領域は、人類の精神生活、約言すれば、特に智識である。智識は、不斷の創造力を以つて、他の文化要素、即ち、宗教、道德、政治の内容及進化傾向を決定する。従つて、他の文化形成作用の影響、例へば、風土の如きものは全然排除せられはしないが、第二次的地位に迄引下げられる。故に、吾人は、智識によつて、人類の過

去、現在、及未來を觀察しなければならぬ。過去及未來から汲出した考慮を基礎とし、現在には、たゞ、兩者を結付ける役目丈與へるならば、吾人の推理は正しからざるを得ない筈である。かくの如く、人類の歴史は、智識の内容の變化に伴つて變遷し、系統立回た姿をなして現れるのであるから、人類の過去、現在、及未來は、同時に、智識の過去、現在、未來であると考へることが出来る。換言すれば、智識を仲介として歴史は系統づけられる。

かく論じてくれば、サン・シモンの史觀は純然たる觀念史觀ではあるが、微細の點はついて深く考慮すれば、その觀念史觀には幾多の特異性の存するのを發見する。吾人は、この點について深く彼の觀念史觀を知悉するには、次の三つの思想を附帶して知らねばならぬ。即ち

第一、彼は、人類の無制限な進歩を信じてゐなかつた事、そこには事物必然の理による確然たる制限が存した事。

第二、個人と社會とは同一の進歩階程をとつてゐる事。進歩は國家と社會とが同一の進歩階程をとつてゐる事。第三、人智の發展は最大多數の幸福の増進に向つてゐる事。進歩は國家と社會とが同一の進歩階程をとつてゐる事。以上三つである。

第一に、偕て、歴史は、因果的に必然の連鎖を示すものとするならば、未來は、過去と云ふ鎖の最後の環から推論される筈である。従つて、良く觀察された過去からならば、正しい未來が容易に推論されうる。吾人は、先入觀念に囚はれない觀察によつて、過去を解剖しなければならぬ義務がある。

この點に於ては、ゴッドルセルには遺憾な點があつた。サン・シモンは、ゴッドルセルの「人智進歩圖稿」は多大の讚美の言を献けて、歴史の本質的内容を認め、偉大なる著書である、假令、その高遠な思想のために、歴史的事實を、合理的確實さを以つて説明し得なかつたとしても、其名稱は永いものであらうと云つてゐるが、他方、ゴッドルセルは、當時の社會事情の影響に壓せられて、科學的研究に必要な透徹と冷靜さを失ひ、事物をあるべきまゝに見ず、斯くあらねばならぬ姿に於て見た。そのため、折角の歴史哲學も小説化してしまつた。彼は、寧ろ書齋に籠るべき才の人であると云ふ批評を下した。

ゴッドルセルは、科學的冷靜さを以つて、過去から正しく未來を引出さなかつたため、人類の無限な完成を肯定する誤を犯してしまつた。サン・シモンは、之れに對して、宇宙全體の服従すべき限界を定めて、ゴッドルセルの如く、無制限な人智進歩の觀念を抱く誤謬を避けた。ゴッドルセルは、人智の完成を過信するあまり、遂に、事物必然の限界を越えて、人智が不斷に進歩したといふ事は歴史の證する所である。吾人は人智の無限に完成するものであると決論しなければならぬ。然し、若し、この意見が正しく正確であつたならば、人智は、かつて彼等が所有して居つた能力に何等の減少を感ずる事なく、新能力をそれに加へた筈である。然るに、歴史は、これと正反對の證明を與へた。ゴッドルセルは、我々が所有してゐる最古の詩であり、又最も良い詩である。又、ナポレオンの像も、最良の像である。これらの事實に於て、現代はそれと先行した時代の産物と匹敵出来ぬ。その代り他の方面に於ては無限に優つてゐる。例之、我々は、我

々の祖先が原素だと考へて居つた空氣や水を分解したり、雷を利用したりする事が出来る(註三)。この事實は、智識の進歩に従つて、人間の新しい能力が、從來の能力を征服してそれに代つたことを意味するのであつて、あらゆる點に於て我々の智識は完成するものでないと云ふことを示すものである。

人智發展の限界と云ふ點については、サン・シモンは、コンドルセルよりも遙かに高い見地に立つて居つた。彼は宇宙を分類して、宇宙を徹ふ一法則を發見した。

「物を構成してゐる各部分をより適切に推理するために其物全體を知らねばならぬ。」然るに、「世人が、現在採用してゐる宇宙の分類は、根本的に誤つてゐる。故に、余は、先づ、余の推理に堅實な基礎を興へるために、それを訂正する事を餘儀なくされる」と云ふ意見から、サン・シモンは宇宙現象三分類に反對した。

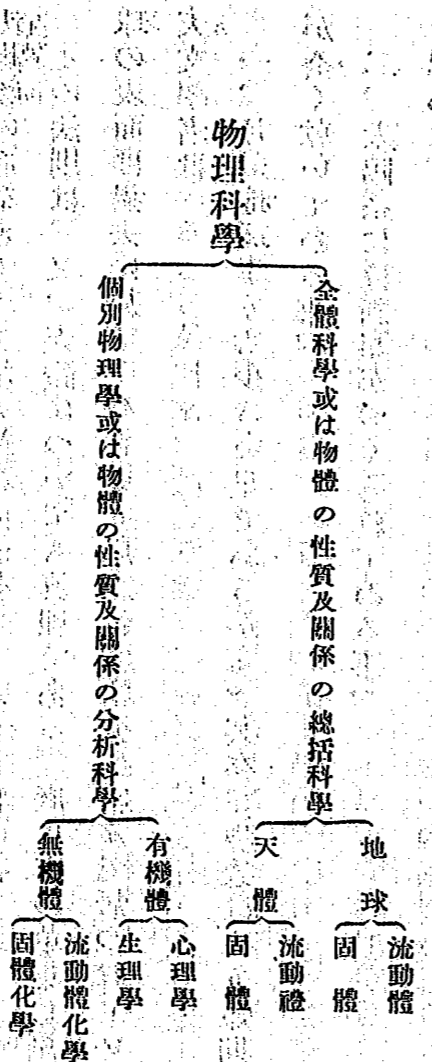
其理由は三つある。

第一に、從來の分類に於ては、天體現象は包有されぬ。吾人は、この現象を三分法による礦物界植物界、或は、動物界の一部と考へる事は出来ぬ。

第二に、一切の科學的分類は、二部分から成るべきであつて、三部分から成るべきではない。何となれば、最も精確で且、最も深奥な比較科學である數學は、一切の比較は、二つの條項に歸結しなければならぬと云ふ證據を、供給してゐるからである。

サン・シモンの二分法に於ては、宇宙の三大要素、即ち、固體の状態にある物質と(これは、無機體を意味する。何となれば、固體の活動が流動體の活動を支配するものが無機體であるから)、流動體の状態にある物質(それは有機體を意味する。ここでは、流動體の活動が、固體の活動を支配してゐる)の分析的比較が表示されてゐる。

圖にて現せば次の如くである(註四)。



サン・シモンは、この宇宙構成論と、他の天文學上、化學上、生理學上の事實の研究とを綜合して、一切を流動體と固體との關係、換言すれば、兩者の闘争といふ觀念に還元して了つた。

曰く「これら一切の現象は、固體と流動體との闘争と考へられる。流動體は或る現象の起因として、固體に特別の影響を興へる。存續期間の半ばを過ぎると固體の活動が優勢になる。そして、固體の活動の優越は、現象が停止する迄益々絶對的になる。固體に定着してゐる分子は、この時には分

解する。分子は分離し、各自に活動し、そして「流動體の中へ入り込む」と(註五)。サン・シモンの發見した此法則は、一切事物の生成消滅を説明するものであつて、人間及動植物礦物に適用しても、等しく、眞理なるを失はない。即ち、人間の小供の場合には、流動體が優位を占めてゐる。人間の死の不可避な原因は、この軟かい部分の硬化にある。石は、最初、溶解した状態にあり、次には、液體中を浮遊する状態になつて沈澱し初める。そして、やがて、少々固著した沈澱物の形をとり、次第／＼に固體化する。最後には、紛末となつて破壊される。

この法則は、又、天體についても眞理である。歴史家の蒐集した事實と、物理學者の研究は、地球の表面は過去に於て、今日より以上に、水分に富んで居つたといふ事を證明してゐる。そこで、天文學者は

- 一、月(地球よりも小さい星であるから、其存在現象はより短期の筈である)は、既に、其表面が全く乾いてゐる事、
- 二、太陽系には新星がつくられてゐる事、

を認めた。

今、宇宙と人間とを比較して見ると、宇宙に於て、大規模に行はれてゐる一切の現象が小規模に行はれてゐるのが人間であるから、人間は一小宇宙と考へることが出来る。

遊星は、宇宙の依存物であるから、宇宙を大時計とすれば、丁度、其中に包有されてゐる振子の如きものになる。人間は、その遊星の依存物であるから、更にその振子の中に包有された懐中時計の様なるものである。

従つて、人間個人は、自己内に於ける固體と流動體との闘争によつて、成長し老衰すると同時に、人類としての人間は、彼が住んでゐる地球に作用するこの闘争によつて、必然に、地球と其生死を共にせしめられる。

かくの如く、人智の進歩には、ちのづからなる一の限界が設立されてゐるのである。この見解によつて、特にサン・シモンの體系にとつては重大な地位を占めてゐる。即ち、彼は、この見解によつて、「我々人類の歴史を初むべきは地質學的考察によつてである。同様に、且、同じ理由で、吾人が人類の歴史を終るべきことも、地質學的考察によるべきである」と云ふ甚だ高い見地から、人智史の初めることが出来たからである(註六)。人智史の出發點をこゝまで溯つて求めた事は、「人類科學に關する覺書」中には見られない思想であつて、「萬有引力に關する研究」に於て、初めて現れてゐる(註七)。

第二に、以上の思想は、個人と社會の智識進歩の階梯を比較觀察する事によつて、愈々明白となる。のみならず、この比較觀察は、同時に、我々をして、人智發展の過去を知らしめ、現在に自覺せしめ且將來を豫測せしむる便益を有してゐる。

人間は、最初、幼兒時代に於ては、主に、養分の吸収に務める。その中、惡戯本能が目醒るに従つて、彼等は、一塊の石をもち上げたり、小さい土塊を築いたり、池を掘つたりする。斧、鋸、釘、槌等は、彼等にとつて、最大の快樂を與へる玩具となる。つまり、小供は、小さい手工家としての

最も強い性癖を有してゐる。

それが、思春期に入ると、藝術家になる。この青年も、音楽を奏し、繪を書き、詩を詠むものである。

二十五才から四十五才までの壯年期に入ると、體力はよく發達し、戰闘的になる。同胞や、自然と抗争し勝ちになる。

四十五才以後は、人間の後半生に入る。いはゞ、人生の下り坂である。闘志は失せて、最早、發見する力はない。生涯の過ぎ來し方を振り返つて、その體驗の決算書を作成するのが、彼等専らの仕事となる(註八)。

個人智識のこの發展史は、そのまゝ、人類全體の歴史に適用出来る。

全行動を肉體的欲求の充足に向けた蠻族は、個人の乳兒時代に相當する。次期のエジプト人は、小兒の如く、大なる石を堆んでピラミッドをつくつた。第二のギリシヤ人は、美術に於て、特に勝れて居つた。それがローマ人になると、戰術に於て多大の才を示し、個人の壯年時代を思はせる。最後に、サラセン人に至つては、個人の老年期に行着いたと同じであつて、彼等は、軍事的に偉大なる征服者であつたと同時に、觀察科學の創始者たるの榮譽を負ふた。以上の觀察結果は、第一の思想を實證する助となるものである。

尚、彼は、この比較觀察の結果として、個人の二年は人類の二世紀に相當すると云ふ推定を得た。何んとなれば、最も信用の置ける意見に従へば、人類は、今迄に約八千年を經過してゐる。然るに、

命の人類は、個人の四十年代に相當する時期に達してゐる。故に、この八千年を四十で割ると、我々は二百の商をうるからである(註九)。

次に、第三の思想の説明に移らう。

かくの如く、個人智識の發展は、人類全體の智識發展と好箇の對象をなしてゐるのであるが、この事は、各時代の紀念物とも見るべき代表的遺作を觀察すれば容易に證明出来る。同時に、我々はこの推移こそ、人類の少數から多數への幸福の眞の發展階段を示すものであることを發見する。

即ち、我々が所有してゐる最古の紀念物は、エジプトのピラミッドである。この紀念物は、存在してゐるものの中で最も怪偉なるものであると同時に、又、嘗つて建造せられたものの中で最も無用なものである。エジプト王は、國民の半数を擧げて、この無用な勞役に従事せしめた。權力の濫用、これに過ぎたるものはなかつた。

エジプト人の遺物に繼いで最も偉大なる紀念物は、ギリシヤの殿堂である。この殿堂は、直接に人間の利益に貢献はしなかつたが、少くとも、又、ピラミッドよりは遙かに勝つて、全國民の享樂に資する効果を有して居つた。然し、この全國民といふ言葉は、未だ、眞正に全國民を意味するに至らなかつた。ギリシヤに於ては、自由人の數が奴隸の數に比較してどうであつたか、と考へて見れば、この點は自ら明白である。プラトンの理想國も、自由人のみの樂園ではなかつたか、や山々火の水道や大道路に至つては、前二者と比較して、その何れよりも、ずっと偉大な公益を有して居つた。然し、この時代に於ても、ローマ人でない國民は、尙、甚だしく不安の状態に置か

れてあつた事實は見逃せぬ。然るに、これを、現代の代表的生産物と比較して見やう。今日に於て、最も重要な記念物は船舶である。サン・シモンが、鐵道や電信を擧げてゐないのは、彼がそれらを知らずには、一八二五年に死んだからである。この記念物が、他のすべての物に優越してゐる事は言を俟たぬ。そして、最も重大なるは、これを、國民生活といふ廣大な面積に於て觀察する事である。

成程我々の祖先は、常に、廣壯な公共建築物を所有して居たが、多數の人民は見るも無残な卑しい生活をして居た。これに反して、現代の代表的建築物は、其規模に於ては、甚だ微然たるものであるが、歐羅巴中の人々は、すべて、よい家に住み、愉快な生活をしてゐる。今日、フランス、獨逸、伊太利、スペイン、及イギリスには一億二千萬人以上の住民が居住してゐる。しかも、彼等は、或る除外例を省く時は(註十)殆んどすべて、よい住居を構へ、營養のある食物をとり、又良衣衣服をつけてゐる。加之、權利の方面に關しては、本質的に總べて平等である。この國に於ても、犯罪人は、その階級如何によつて罪に輕重があると云ふ事は決してない(註十一)。我々が運命は、出デット人以來、不斷に改善せられつゝある事は、かくの如く、歴史が實證してゐる。この思想は、サン・シモン究極の標語である。社會の目的は、最大多數の最大幸福を計るといふ以上、三つの基本的、或は、派生的考察を附帶條件として、サン・シモンは、マルクスの所謂、生産力の發展に該當する智識力の發展によつて、一切の上層建築たる社會現象を説明せんと企てたのである。

註一 Saint-Simon, Oeuvres choisies vol. II, p. 193-196 Travail sur la gravitation universelle.

註二 Saint-Simon, op. cit. vol. II, p. 227-228.

註三 Saint-Simon, op. cit. vol. I, p. 184; Introduction aux travaux scientifiques du XIXe siècle.

註四 Saint-Simon, op. cit. vol. II, p. 69. Men o're sur la science de l'homme.

註五 Saint-Simon, op. cit. Vol. I, p. 181. 現象は固體と流動體の闘争による。云々法則は、「萬有引力に關する研究」に於ては、又、次の如く書かれてゐる。「あらゆる分子は、最少の抵抗を與へる方面に動く傾向をもつてゐる。」(Saint-Simon, op. cit. vol. II, p. 215)

註六 Saint-Simon, op. cit. vol. II, p. 234

註七 Saint-Simon, op. cit. vol. II, p.

註八 Saint-Simon, op. cit. vol. I, p. 177-178; vol. II, p. 105-107.

註九 Saint-Simon, op. cit. vol. I, p. 180.

註十 Saint-Simon, op. cit. vol. I, p. 22.

註十一 Saint-Simon, op. cit. vol. I, p. 183.

三

サン・シモンの歴史體系は、二時代より成る、そして、其最初の時代は、人類史敍説とも云ふべきものであり、二つは再分されてゐる。

第二の部分に於てサン・シモンは、地質學的考察を歴史に援用した。前述の如く、人類は地

球の存在と聯絡してゐる。従つて、地質學的考察は、當然、人類史の序説の用をしなければならぬと云ふのが彼の意見であつた。

即ち、彼によると歴史は地質學的研究によつて初められねばならなかつた。然し、この點については、サン・シモンは、少ししかのべて居らぬ。故に、地球は、初め、水に蔽はれて居つたので、長い間人類及其他の動物にとつては、生存出来ないものであつたといふ丈に止めやう(註一)。それで充分である。

第二の部分は、地球上に動物及人類の住み得る様になつてからの歴史を包有する。サン・シモンは、この部分に於て、特に、有機體、無機體の研究を行つた。動物は、組織の有機化した程度に比例して完成するものである事を實證するに努力した。「人類科學に關する覺書」の前半に、この研究が述べられてゐる。

サン・シモンは、そこで、先づ、有機體の各組成分は管である。この管を通じてゐる流動體が生命に必要な要素である。この流動體こそ、生理學本來の目的對象である、と云ふ結論を得た(註二)。次に、彼は生物を其有機化程度に應じて正しく階級づけることを試みた。この點に於ては、彼は醫師 Bowson に負ふ所が多い。

サン・シモンによれば、Bowson は異常な賢明な頭腦の所有者であり、且、生理學的には大なる未來を有する人であつた。サン・シモンの研究に於ける重大な二つの缺陷を満した中の一人が、實にこの Bowson 博士であつた。サン・シモンは一の疑問を提出した。

「生理學にとつて、従つて、余の研究にとつて、重要な諸點の一つは、各動物の智識は、そのものの構造に比例してゐる事、従つて、智識は構造の結果影響である事、換言すれば、智識的階梯は組織階梯と同一である事を證明するにある。生理學者は、組織の階梯に於て、人間の直後に猿を置いた。然し、之れに反して、海狸は、明白に智識の階梯に於ては猿の前に置かれる價値がある」と(註三)。

Bowson 博士は、熟考した後、之れに次の如く答へて、サン・シモンを常惑から救つた。生理學者が、猿を人間の直後に置いたのは誤である。猿が手に於てのみ掴む手段を有してゐるといふ關係と、海狸は、拇の内轉筋に彼の觸覺を形成してゐるものを有してゐるといふ關係とを考慮して、海狸の組織は、猿のそれに優れてゐるといふべきであつた。又、動物に於て、智能の高度を證明する活動は、共同の仕事にある。海狸は、この關係に於ても、猿の智能の働さが個人的であるに對して甚だ優越した共同作業を行つてゐる事を示してゐると。

以上の觀察、及其他の考察を綜合して、彼は、無機體と有機體との研究から次の如き結論を得た。「常に、人間は有機體を二つに分類した。一つは人間に有害なるものから成り、他は人間に有用なるものから成る。前者は之れを絶滅し、或は、少くとも住居から可及的に遠ざける様な手段をとり、後者は之れを奴隸化する様に努力した。この努力の始に於ては、人間その他動物に對する優越の度は甚だ微弱であつたが、代々時を経るに従つて増加して行つた丈である。其本質に於ては、人間は他動物と異なる性質のものではない。完成する能力は、一切の動物に共通である。故に、若し人間が地球から消滅したならば、彼の後で最もよく有機化してゐる動物が完成するであらう(註四)これがサ

サン・シモンの有機體の本質的研究の結果であつた。

以上、彼の歴史の序説をなす部分は、甚だ無價値である如く見え、且、人類史には直接關係して居らぬ様に思はれるが、これは、人間前史を形成するといふ點と、もう一つは、サン・シモンが歴史を體系づけやうとする偉大なる努力の結果であるといふ二つの意味に於て、缺くべからざる部分である。

第三の時代に於て、サン・シモンは、初めて、我々人類の歴史に筆を染めた。

彼は、愈々、人類史を綴るに際して、其最初の部分に對して特別の考慮を拂つた。その部分とは、彼の區劃に従へば第一期から第六期まで、換言すれば、原始人からエヂプト人迄の部分である。

今日迄この部分の歴史について云はれたり、書かれたりした事は、少しも、觀察事實を主臺とせず、専ら推測事實のみ據るべきものとして居つた。従つて、サン・シモンが目的としてゐる人類の科學は、この部分が確實にならない限りは、依然として推測科學の領域に囚れて居らねばならぬ。彼が、この部分に特に注意を拂つたのはこの理由であつた(註五)。

この部分は、史家にとつて、實に窺ふべからざる程の厚いベールを以つて蔽はれてゐるが、幸にも、サン・シモンによれば、彼の屬する物理的生理學者の眼のみは之を見通す視力を有して居つた。彼は、彼の有するこの視力を助けるために、科學たる人類學に避難所をとつて、こゝから人類の歴史の暗黒時代に大なる炬火を投込んだのである。

前述した有機體の研究が、之に對して重要な資料となつた事は云ふまでもない。其他、サン・シモン

は就中へ *Bovgavillies & Cooc* の研究を參考にして得る所があつたらし。

但し、こゝに注意して置くべき事は、「人類科學に關する覺書」の中に主として展開されてゐるこの思想と反對の句が、「科學序論」の中に存在してゐる事である。即ち、そこには「エヂプト人から始めるのは不合理の様に見えるが、彼等のより以前の國民に關しては何等明確な記録も知識も我々に遺されて居らぬ、従つて、之れを敘述しても利益にならぬからである」と云ふ様な句がある。

この事は、一見甚だ矛盾の様に見えるが、これは寧ろ彼の思想の發展の結果として生じた矛盾で、反つて彼の發展を證するものであらう。何んとなれば、この矛盾をば、我々は、「科學序論」に於ける部分的挿繪的敘述が「人類科學の覺書」に於ては、綜合的體系的敘述と變つた結果であると判斷する事が出来るからである。

かゝる豫備的考慮に暫時滞留した後、サン・シモンは人類の歴史を十二期に分割した。

第二期

第一期の原始人は、組織の優越から直接生じた結果以外には、何等他動物より卓越して居らぬ。原始人の記憶なるものは、海狸や象のそれと殆んど變りはない。アベイロン *Aveyron* で捕へた野蠻人で、この觀察は實證された。サン・シモンは、この蠻人 (*Victor* と云ふ名を與へられた) について詳しく述べてゐる。

如て野菜を喰つて居つたこの蠻人を捕へて、いろいろ調へた結果、この男は絶対に無智な状態に居る事、植物であれ、動物であれ、すべて生の物を喰べる習慣を有し、焼いたものは極端に厭ふ事、

着物を着せやうとしても頑固に拒む事、しきりに森へ逃去しやうと努力する事が分つた。ついで、人々は、この蠻人を學者の研究材料とするために巴里へ送る様に命ぜられた。

巴里に送られたアペイロンの野蠻人は、最初、僧 Suard の手に移された。人間が神の存在を信ずるに至るには、教育の助を必要としないと深く信じて居つた彼は、この蠻人を使用して、自分の信念を證明しやうとしたが、「抽象的な事物については、全く無感覺な程の無智で武装してゐるこの生徒は、この形而上學者の試みをすつかり失敗させて了つた。」 Suard の努力に拘らず、この Victor は、自分の孤獨生活時代の悲しい話をして聴衆の涙をそゝらなかつたし、又心の奥底から最高の存在への輝かしい憧憬を示して、最も不信仰な聴衆でさへ改宗しやうと思ふ程の興奮を示しもしなかつた。そこで失望した Suard は、この生徒は生來の愚者であると公言して、彼を放擲して了つたので、次に、聾啞學校の創設者である Serr 氏へ彼は移された。

この醫師は、この若者を研究すると同時に、教育するに務めた結果、

一、彼は愚鈍ではなかつたといふ事

二、彼は生來の聾でなかつたし、又 Suard から甚だ虐待された後でもそうはなつてゐなかつたから、この點に於ては、話す事を教へるのには何等の障害も有してゐなかつたといふ事

三、發音機關は良好の状態であつた。この事は、多くの食物の名を明白に發音させて證明するを得た(註六)。

結局人類と動物の本質的差違は紙一枚の如く薄いものであると云ふのが、此第一期の要約である。

この結果或は、この出發點は、サン・シモンをして、自然人は幸福な生活を遂つて居つたとするルソー一派の推定と全然一致しない立場を守らしめてゐる。

ルソー一派の思想は、不完全な文化感濁に對する不満から出發して、未開原始の状態にこそ、未來の社會の姿があると認めたとであるが、サン・シモンによれば、アダムとイヅの天國に於ける幸福も、又、文明の爲に引離されたと云ふ自然人の幸福も、何れも、非歴史的觀察法に發する一幻影に過ぎないのである。斯様な見方は、詩人か空想家の生産物である、眞正な歴史家科學者の見方ではなかつた。彼曰く、「詩人等は、この黄金時代を原始時代に押しやつた。然し、人類の黄金時代は決して、吾人の背後に在るのでなくて、吾人の前にあるのだ(註七)。神が、アダムとイヅに對する彼の怒を醫やすべき方法を我々に残して置いてくれたのも、このためである。」

未來を信ずると云ふ確信に於ては、我々はサン・シモンに於て、ダランベールやルソーの後繼者よりも、寧ろコムドルセーの後繼者を發見する。

第二期

この期を代表するものは、船長クックが、マゼラン海峡附近で發見した土人である。彼等は穴居し、火をつくる事を知らず、家を建てる事も知らなかつた。

第三期

同じくクックが、アメリカの北東岸の北部で發見した住民によつて代表される。この時代の人間は住家を建てて居つたし、又、政治組織の最初の萌芽をも有して居つた。

言語は發明の發端にあつたが、甚だ局限されて居つた。計算は三つ以上は出来なかつた。

第四期

クック及其他の航海者が、アメリカの北西岸の北緯五十度邊で發見した文化状態の土人は、甚だ完全な言葉をも有し、首領の下に服従し、猛烈な人喰人種であつた。この名残は、今尚、ニュージールランドに存してゐる。

こゝで注意すべき事は、人間は初めから人喰人種でなかつたと云ふ事、智識の或る發展を獲得した後に、初めてそうなつたといふ事である。即ち、甚だ多殺的攻撃的な武器が發明されて以來、人間は他人を殺す事を教えられたのである。

第五期

此期を代表するオミイ諸島及サントウチ諸島の住民の文化は、甚だ進んで居つた。言語も貧弱ではない。人を喰ふことも全く跡を絶つて居る。そして、住民は、Fares、Toufous、等の三階級に分かれ、組織的の僧侶が宗教儀式を司り、社會全階級から尊敬されて居つた。

第六期

スペイン人に發見され且征服されたメキシコ人及ペルリ人は、甚だ多數から構成せられ、且、治者と被治者との劃然と區別された政治社會を樹立して居つた。彼等は、金屬を採掘し、細工し、其上、それを建物の裝飾に使用する方法を發見して居つた。彼等は、美術工藝については顯著な進歩を示して居つた。これが第七期に代表する。

以上の第一期から第六期迄は、人類學を援用して説明せられ、前述せし如く人類科學に於ける從來の缺陷を訂正して、斯學に實證的性質を附與するために補足せられたのであるが、是れより以後は文化の特質を歴史事實自體に求めた眞實の文化階梯に入るのである。

註一 Saint-Simon, op. cit. vol. II, p. 229.

註二 Saint-Simon, ibid. p. 83, 85.

註三 Saint-Simon, ibid. p. 38.

註四 Saint-Simon, ibid. p. 135.

註五 Saint-Simon, ibid. p. 100, Not. I.

註六 Saint-Simon, ibid. p. 92-97.

註七 Saint-Simon, ibid. p. 328, De la Réorganisation de la société européenne.

四

事實に基礎を置いた歴史はエチオピア人から初まる。

第七期

エチオピア人は、人智が、其發展の長い經歷に於て越えなければならぬ最も困難な峠の一つを越えた(註一)。それは文字の發明であつた。勿論、文字の發明者がエチオピア人であるか否かと云ふについては、多少の疑問はあるが、サン・シモンは、之れに對しては斷乎たる決定を與へた。曰く

「……彼等が實際にそれを發明したのか、或は、彼等は、それを再發明したに過ぎなかつたか、そんな事はどうでもいい。何んとなれば、我々の目的は、人智進歩の發展階段を明白に打建てること

とであるから、盲操的思想では、この目的を達する事は不可能であらう」と(註三)

この時代に發する倫理科學と觀察科學との萌芽は、社會に、常に原因と結果の觀念を一致させるに努力する階級と、常に抽象されたものを實體化して來た階級との、二つの判然たる階級區別を構成した。科學的研究と侍職を兼ねる學者團體と、一般の無智な民衆とがそれである。加之、この學者團體は、國家に於ける最初の政治權力として、絶對權力を行使して居つた。

この團體は二つの學說を有して居つた。一つは、一般人民に彼等が教えたもの、即ち、目に見える原因を第一位の原因としての信仰 (Doctrine) であつた。

彼等は、人民をして星、川、山、或は、動物を尊敬せしめ、その中から、特に彼等の注意を最もよく惹くものを選択して、それに世界を支配する權力を賦與した。これは、丁度、石に躓いて傷いた子供が、大いに怒つて、石に向つて、「この性悪石奴」と叫ぶのと同様である。小兒の頭にある旺盛な空想力は、すべてのものを、生きてゐるものと思はせ、彼をして、かゝる叱責の言を發せしめるのである。他の學說は、學者が自己のために保有して居るもので、人民に教えて居つたものよりも、遙かに高級であり、遙かに形而上學的のものであつた。彼等の意見は、目に見える原因は二次的原因結果にすぎぬ、一次的の原因は目に見えぬものでなければならぬ、と云ふのであつた。

以上、この國民の研究から我々の得る所は、「祭祀權力と科學能力とは、其本質に於て、同一物である」と云ふ確信と「或る宗教の僧侶團體は、最も教養ある團體でなければならぬ。彼等が最も教養ある團體でなくなつた時には、彼等は次第に尊敬を失ふ。彼等は、遂に、破滅し、最も賢明なる

人々の團體が代る。この變化は、普通思想に改新があつた時に到來する」との二結論である(註三)。

第八期

エチオピア人中の先覺者の胸に包有されて居つた、目に見えぬ原因を、萬有の解明原理とする新宗教は、やがて民衆の宗教となつて、ギリシヤ社會制度の特色をなすに至つた。

ギリシヤ人に關する觀察を要約すれば、

一、思想家によつて發見された一思想が、一般民衆によつて採用される度毎に、人智に大進歩が常に行はれたと云ふ連續的事實である。即ち、エチオピアの學者は、目に見えぬ原因の概念にまで上つて居つたが、エチオピアの人民は、未だ、目に見える原因の思想しか持つて居なかつた。然るに、ギリシヤ國民は、目に見えぬ原因の存在すると云ふ意見、換言すれば、多神教の土臺をなす意見を採用した。

二、ホメロスの想意力は、人間の有する各能力を個人化したオリンピアの神々をして、宇宙を支配する配慮を引受させた。彼は、かくして、多神教を完成したのである。

三、人間が、社會組織について眞面目に研究し初めたのは、ギリシヤ人からである。彼等は、理論的に政治學の原則を設立したばかりでなく、又その實際方面についても研究した。我々は、彼等の中から、リカルガス、ドラゴン及ソロン等の大立法家を數々上げることが出来る。しかも、此政治學は、彼等幾千の市民の間の日常會話の話柄であつた。人々は、公集會に於て、屢々、其原則と其適用について意見を闘はせた。

其特に、ギリシヤの政治社會について注意すべき點は、ギリシヤ社會の總聯契が宗教であつたといふ事である。

彼等がデルフォイの神托に對する信託は、ギリシヤ社會の構成員に、彼等の利害の共通してある事を教へ、以つて、彼等各自の愛國心を抑壓する楔となつた。僧侶は、この託宣によつて、ギリシヤ民族間の一致協同を維持し、ペルシヤ人の來襲に拮抗したのである。従つて、「一朝、このデルフォイの寺院が潰さるるや、その瞬間から奸人ヲリシヤはギリシヤの内政に干渉し、自ら指揮者となり、一躍して統治者に上つて了つた」(註四)。

三、ギリシヤ人は、藝術上に頗る卓越して居つた。

四、一般科學に就いて發見された概念を、我々が實際に適用するのは、常に、其次期である。我々は、この肝要な法則を、ギリシヤ人を中心として考へる事はよつて立證する事が出来る。即ち、多神教を發見したのはエゾプトの僧侶であつたが、その歸依者となつたのはギリシヤ人であつた。これと同様に、ギリシヤに於てソクラテスの腦裡に生れた「神教は、彼の死後二百年にして、初めてローマ人の間に確立された」。

最後に、ソクラテスに就いてもつと述べる必要がある。サン・シモンが、ギリシヤの大文化として認めたものは、人智の史的發展に劃世的大刺戟を與へたソクラテスの學說であつた。

サン・シモンによると、ソクラテスは未曾有の大人物であつた。彼は、「科學序論」に於ける史的證明が與へた、分析と綜合の交互使用といふ科學的方法の發見者であつた。

彼は、ホメロスによつて創設されたオリンパスの諸神を部分内容として包含する、一つの合成的唯一無二の原因を考出した。彼は、人間は一切のものを唯一の原因の結果であると、考へるべきだと其門弟に教へた。

又、ソクラテスは、歴史上の一大分水嶺を形成して居つた。

サン・シモンによると、前述した如く、事實を基礎とした歴史はエヂプト人から初まつたが、眞に科學者の研究對象と爲す價值を有する部分は、ソクラテス以後の近世史であつた。今日迄の歴史の分類は、甚だ謬つて居る。正しい分類はソクラテスを基調として樹立されねばならぬ。何んとなれば、ソクラテス迄は、人類の搖籃地であると信ぜられてゐるタルタリイの高原を下つた四民族——彼等は、各自、四つの主要なる地方へ、即ち一は支那へ、一は印度へ、一はパレスチナへ、最後のものは、ペルシヤへ——は、何れも、神と云ふ觀念の明確なる概念を持つて居なかつた。これは、初めて、統一性を與へたのがソクラテスであつた。従つて、ソクラテス以後と、以前とは、甚だ興味あり、且甚だ教訓的である部分と、然らざる部分との鮮明な對象を成してゐるからである(註五)。

サン・シモンが正當なりと信ずる歴史の分類は次の如くである(註六)。

人類史

古代史(人類の歴史以來ソクラテス迄)

1 人類の起源からモーゼ迄

2 モーゼからソクラテス迄

近世史(ソクラテスから現代迄)

1 ソクラテスからマホメット迄

換言すれば、第二期から第八期迄が古代史に相當し、第八期から第十二期迄が近世史である。第八期は古代と近世の分岐點である。

第九期

ギリシヤ人から、殊にソクラテスから、最高の精神的遺物として、新らしい人智に順應した一宗教を承繼し、これを人民の宗教として完成したものはローマ人であつた。この一宗教の完成は、ローマ人の大なる貢献であつた。そして、他の一つの貢献である市民權の確立といふことと相俟つて、それは、ローマ人に特異な性格を與へた。

この二大貢献の結果は見逃すべからざるものである。

自體、多宗教の統治する社會制度は、同一の言語を用ひ、且甚だ小規模の國に住んでゐる極く少數の人口にのみ適して居るのであつて、言語風俗、氣候風土を異にし、従つて、異なる生産物を有してゐる多數の政治社會の基礎となることは不可能であつた。統合された政治社會を構成してゐる近代歐洲人は、數に於て極めて多數である、廣大な國土に住み、言語風俗を異にしてゐるから、甚だ高い統一原理によつてしか統合され得ないのである。ローマ人の一宗教樹立は、かゝる高い統一原理への第一歩をなしたものである。

又、ギリシヤに於ては、自由民は甚だ少數であるが、近代歐洲では、一億五千萬の人が市民權を享有してゐる。この幸福な變化を導いたのが、ローマ人によつて開かれた市民權の制度であつた(註七)。

人口の増加及國土面積の擴大に於て、統一原理(宗教)の變化の理由を發見したサン・シモンのこの思想は、甚だ片鱗的ではあるが、社會力そのものの發展をさへ認容したものと云つていいのではないであらうか。

第十期

人智に第十期の進歩をなさしめたものは、サラセン人、即ち、アラビヤ人である。代數を發明し、又視察科學を建設したのは彼等である。實に、サラセン人は、ソクラテスに次ぐ科學進歩の貢献者であつた。

サン・シモンの定義によると、最良の近世史は、ソクラテスからマホメット迄のデイズムに關する研究について、又、マホメットから今日迄のフイデイズムに關する研究について讀者の注意を集めるものでなければならなかつた。然るに、この意味に於て、完全な歴史と見るべきものは一つもなかつた。現在、存するものの中で最良のものとされてゐる Langleit, Dubrenoi の近世史の如きも、其四分の三は無意義な事件の羅列である、最も重要な、アラビヤ人の科學的發見については何等記述して居らぬ。最近アラビヤ人の歴史研究の必要を感じ初めた學士院が、多くの中から、優秀なものとして推賞した Volney の著の如きも、アラビヤ人の歴史を政治史と科學史の二つの區別すると

いゝ重要な分類を採用して居らぬ有様である。……
かくの如く、人智發展に對して重大な價值を有する當期の研究は不完全であつたからして、ダラ
ル・ド・ブルが「百科全書序論」に於て、「コンドルセーが「人智進歩史圖稿」に於て、況んや、それ以
下の著者が中世を以つて、人智進歩の時代を認定したに對して、最初、サン・シモンは其誤謬を指
摘する術を知らなかつた。

人智進歩に對するこの障害から、彼を救つたのは Oelsner であつた。彼は、一八〇九年に學士院
から賞を受け、一八一〇年に公刊した、「Des effets de la religion de Mahomet」に於て、「アラビ
ヤ人は、十五世紀迄發見の方面に於て人智を指導し、且、宇宙が服従してゐる單一の法則を發見す
るために盡した努力によつて、彼等は歐羅巴人より進んで居つた」と云ふ斷定を下した(註八)。

サン・シモンは、又、以上の四民族を比較視察して、エヂプト人、ギリシヤ人、ローマ人、及サラ
セン人が人類の科學的前衛となつたといふ共通事實は、彼等の領土的地域が自然に恵まれた孤立獨
立的の状態にあつたがためであると論じてゐる。然し、この位置的要素を絶対の文化決定要素であ
ると彼が認めて居なかつた事は、云ふ迄もない(註九)。

第十一期

中世紀と云はる、時代である。ソクラテスの死後五百年にして出現したキリストは、學者は一神
教、民衆は多神教と云ふ區別を消滅させて、ダイズムを基礎とする一新宗教を樹立した。ポロロ、
及その門弟は、この教の組織化と布教のために努力した。かくして、遂に、ダイズムを信奉する僧
侶は歐洲を聯合する樞となつた。

キリスト教理に基いて、歐洲諸國を一丸とし、堅固な社會を創造したのが、シヤトレマンである。
彼は、恐るべき劔の威力と、彼の深奥な政略とによつて、歐洲民族の首領となつた。俗界の權力丈
では統制不可能と認められた彼は、組織的力であるキリスト教を援用して、あらゆる關係に於て社會改
造といふ偉業を完成した。彼は、法王を擁立する事によつて、政權を教權から分離させ、共通の利
害國民的利福を促進すべき前提をつくつた。この教權の確立といふ事は、文化の進歩に多大の貢
献を寄與したシヤトレマンの大功績であると云はねばならぬ。

シヤトレマンから今日迄、歐洲社會は、物質的關係に於ては不斷に有力な進歩を辿つて居つたが、
人智に關しては、全體的に何等の進歩を行はなかつた。なす所は個別科學の完成にすぎなかつた。
従つて、公平なる史家の眼には、十五世紀から今日迄の研究は、エヂプト人、ギリシヤ人、ロー
マ人、及アラセン人と同列に置かれる價值を持たなかつた。第一者は原因と結果の觀念を區別した。
第三者は多神教を組織した。第三者は一神教を組織した。最後の者は一神教を構成する活動的「原
因の代りに、宇宙を支配する法則の觀念を以つてした。然るに、我々は、個別科學の完成によつて、
アラセン人の研究を確立させたに過ぎぬ。多數の法則を統一する唯一の法則の觀念を完成する事は、
第十二期の文化に俟たねばならぬ。

第十二期

この文化形成期は將來を意味する。

キリスト教のみが、永遠の生命を持つ事は許されて居らぬ。しかも「キリスト教が組織されて以來、既に、千五百年になつた。千五百年後に人間が所有してゐる智識を、最善の秩序に排列するのはキリスト教が不充分になつた」として、決して、驚くべき事ではなかつた(註十)。人智の進歩は、當然、新社會原理を要求したのである。

サン・シモンは、キリストを目して愚であると云つた(註十一)。それは何故か。キリストは、教義の基礎として、デイズムを採用したからである。キリスト教樹立以來、當時の學者團體である僧侶は、全く、一神教の奴隸となつて發達すべかりし思想の萌芽を幾何か剪除して了つた。學者をして、暫時でも輿論の指導者たる地位にある事を忘却するといふ、大なる錯誤を犯さしめた點に於て、キリストは正しく賢者ではなかつた。

然し、ともかく、シャール・レーマンの努力以來、換言すれば、デイズムの建設から十五世紀に至る間は、僧侶は、其才能に於て、又その徳行に於て、俗人よりは確かに優秀の地位を占めて居つた。荒地を開拓し、不健康地を根絶して人の住みうるものとしたのは、彼等である。古文書をよみ、俗人に讀み、書き、計算を教授したのも彼等である。最初の病院及學校を建て、又全歐洲を聯合せしめて、カラセンに對抗する武勇を鼓舞したのも彼等である。一言にして云へば、七世紀から十四世紀迄、彼等は「才能ある者は常にそれに相當する報酬を獲得する」と云ふ法則に従つて、權力、尊敬、財富の諸點に於て不斷に向上して行つた。そして、ヒルデブランドの時に於て、僧侶は勢威の頂上に自己を發見したのである。然し、此時以來、僧侶の優越は、恰も潮が自己の發見した土地を去るが如くに、沖へ引き初めた。これに對して撞頭した新學說の要素は、アラビヤ人によつて歐洲に輸入された諸科學(代數、天文學、化學、生理學)であつた。

El-Mamoun の下で新科學樹立のために努力したアラビヤ人は、七世紀から九世紀の間、政治及科學の方面に於て、最も偉大なる才能を發揮した。そして、十四世紀に至ると、バグダッドに現れたこの曙光は、伊太利の文運復興の上により大なる光を發して現れた。

文藝復興に於ては、俗人に、先づ勝利の聲が上つた。ラファエル、レオナルド・ダ・ヴィンチ、及びミチランゼロの三大偉人は皆俗人であつた。幾許もなく、マキアベリイは、神聖なる殿堂のカーテンを掲げて、そこに隠されてあつた機關を民衆に見せた。彼は、僧侶が科學の進歩に對して最早無氣力な事を證明した。

次いでコペルニクスが起つた。彼は、太陽系に屬する諸星の地位及相關的運動について、一つの新概観を與へた。コペルニクスの太陽中心説を確證した者はケプレルである。彼の業績の最重要なるものは、惑星運動の三法則の發見であつた。

「二惑星の週時間の平方は、互に、それらの中心體からの距離の立方に比例する」と云ふ其中の一法則は、これを證し得たケプレルにとつては、何故にそれが成立するのであるか窮知し得なかつたから、恐らく、單に一つの神祕的調和として眺めたにすぎなかつたらうが、こそこれ、ニールトンの偉大なる發見の基礎をなすものであつた。前二者の思想を採用したガリレオは、遂に、「地球は廻る」と斷定した。サン・シモンはこれを評して曰く、「打撃は心臟迄達した」と。

ガリレオの言に對して法王廳は、「地球の廻轉は不可能である」と反駁した。改説を強制されたガリレオは、改説の誓書を朗讀した後、「でも地球は廻つてゐる」と心中に呟いた。

地球が動き、人智が進む事は禁止すべきやうもない。僧侶の失墜は、この時に來、俄然急角度となつた。平凡な思想家ですら、僧侶の終焉の近い事を疑はなかつた。

十六世紀には、更に新星が二つ、科學の水平線上に燦いた。ペーコンとデカルトは、智識の古い殿堂にひしめき合つてゐる全教徒を驚かした。二人は、人間の理性を捕へて坩堝の中に投じた。彼等の實驗は「人間は理性によつて自認し、經驗によつて確立された事物以外は信じてならぬ」と云ふ反キリスト教的の結果を示した。

十七世紀末には、僧侶の權威回復のために Bossuet が起つた。然し彼の望む所は、キリストの復活であつたに拘らず、其努力は、反つて、僧侶顛覆の哀鐘を叩き、僧侶の墓穴を掘るにすぎなかつた(註十二)。

「物理學者は、普通事實の探求に専心すべきである」といふペーコン及デカルトの指導に従つたニユートンは、遂に、萬有引力の法則を發見した。この發見が、充分歐洲に擴つた時に、フランスの俗人學者によつて、キリスト教攻撃の聯合軍が組織された。この總攻撃は、知識のあらゆる方面に於て、科學的視察が信仰に勝る事を立證した百科全書學者に、勝利の聲が上つた。

かゝる見地に立つ、サン・シモンが、宗教改革者たるルーターに、嚴重なる批判を怠る事はなかつた。彼は、ルーターを偉大なるものと見なかつた。サン・シモンによれば、ルーターは、たゞ宗教に身を献げた云ふにすぎないのであつて、直接には少しも普遍思想の成完に貢献しなかつた。人智の進歩と云ふ點から云へば、寧ろ、彼の反對者たるレオ十世の方が勝つて居つた。僧侶としては非難すべきである代りに、哲學者としては優れて居つた彼は、文化を受入れるには決して吝かではなかつた。彼は、或る意味に於ては、ガリレエ、ペーコン、デカルト等の先驅者と云はれてよかつた(註十三)。

之れに反して、ルーターのなす所は全く反對であつた。新ドイヅムの建設は、文化の正當なる進歩に對して甚大なる阻害であつたに拘らず、ルーターの目的とする所は、一に、ドイヅムの復活であつた。

「歐洲各國の政治状態に、又、文化の進展は及ぼせるルーターの宗教改革の結果如何」と云ふ、學士院提出の問題に解答して賞せられた Charles Villers は、其論說に於て、ルーターの改革は人智の發展に左したる貢獻をしなかつたものと斷定した。

その結果によつて判斷せよ、とサン・シモンは云ふ。

獨逸は、ルーターの宗教改革を採用し、フランスは、それを斥けたが、文化の進展に最も貢獻したのは兩國民の何れか?

サン・シモンの見る所によれば、多くの僻見を捨て、階級間の親睦を計り、多數の有産者階級を有し、しかも、下層階級が、衣食住に於て甚だ向上したのは、ルーターの改革を採用せしドイツに非ずして、之を斥けたフランスであつた(註十四)。フランスが、ルーターの改革を受入れなかつたの

は、嫉妬からでも、又、ルーターの反對者を援助するためでもない、彼の思想其物に、何等新要素が含まれてゐなかつたからである。

故に、我々は、新宗教樹立の道を開いたのはルーターでなく、彼の死後に現れ、フランス學派の教導となつたデカルトであると云はねばならぬ。法王が、政治的權力を振はなくなつたのは、ルーター出現以來に非ずして、デカルト出現以來であると訂正しなければならぬ。ルーターの失策はこれに止まらぬ。ルーター、拙策極まるルーターは、イギリスをローマに結びつけ、大陸に従屬せしめて居つた宗教的紐帶を、この改革によつて破つて了つた。(註十五)この結果、大天オシャーレマンが加へた束縛から自由な野心へ解放された英國人は、彼が有する自然的環境を利用して、商業的發展により、恐らく、大陸諸國民を征服して了つたであらう(註一六)、若し、ナポレオンが、この島國民に對抗して、歐洲社會を統一しなかつたならば。

要之、シャールレマンの歐洲聯盟組織の努力に對し、ルーターは、それを分割し、分裂さす反對的態度を執つたものである。かゝる態度こそ、人數必然の趨勢たる一大統一への氣運に對して少からぬ阻害を呈するものと云はねばならぬ。

サン・シモンは、かゝる理由で、ルーターには眞向から反對した。そして、人智進展の最近の生産物たるニュートンの萬有引力の法則の完成に於て、第十二期の基礎原理を求めたのである。以下、サン・シモンのこの期に對する詳細な考察について語る事にしよう。

註一 Saint-Simon, op. cit. vol. II, p. 100.

註二 Saint-Simon, op. cit. vol. II, p. 101.

註三 Saint-Simon, op. cit. vol. II, p. 104.

註四 Saint-Simon, op. cit. vol. II, p. 109.

註五 Saint-Simon, op. cit. vol. I, p. 188.

註六 Saint-Simon, op. cit. I, p. 192.

註七 Saint-Simon, op. cit. vol. II, p. 119.

註八 Saint-Simon, op. cit. vol. II, p. 58.

註九 Saint-Simon, op. cit. vol. II, p. 257-258, vol. II, p. 115-117.

註十 Saint-Simon, op. cit. vol. II, p. 189.

註十一 Saint-Simon, op. cit. vol. II, p. 207.

註十二 Basseuetの著作は「萬人は神の眼には平等である」と云ふ思想の發展である。然るに、この平等觀念は下層階級が上流階級の地位に追上らんとする希望を傳播する指導原理であるから、サン・シモンの逆説的説明を使用すれば、「彼は、フランス革命の主要な著者であつた」。(Saint-Simon, op. cit. vol. I, p. 210, Note I.)

註十三 Saint-Simon, op. cit. vol. I, p. 247.

註十四 Saint-Simon, op. cit. vol. I, p. 250.

註十五 Saint-Simon, op. cit. vol. I, p. 252.

註十六 サン・シモンが、英國は、商業の發展によつて歐洲大陸を證明すると推定したのは、次の如き論據によつてゐる。
サン・シモンは英國人とローマ人の實行した専制政治の差違を擧げて、これを二つの原因によるさした。第一に、イギリスは島に住んでゐる。ローマ人は半島に住居して居つた。従つて、前者は、大陸諸國民と直接に接觸してゐ

なかつたから、後者の如く絶対專制政治を布くことが出来なかつた。第二に、文化は非常に進歩したから、昔程の專制政治は最早實行不可能になつて居つた。

そこで、イギリス人の探つた手段は、商業的證明であつた。サン・シモンは、當時のイギリス人の意見は、大體次の如くであり、且、政府もこの方針によつて居つたこと云つてゐる。即ち、「大陸諸國民は、甚だ開化してゐるから、我々は彼等を證明して、直接支配を彼等に振ふことは出来ない。然し、我々が、彼等のやり始めてゐる勢力平均制度を維持させておく限り、又、我々が、封建制度から彼等の脱出するのを防いで居る間は、彼等の中の何人も、海上に於て、我々と争ふ事も、産業に於て、我々と競争する事も出来ないだろう。制海權を持つてゐるから、我々は無智なるものの住んでゐる地球のあらゆる部分の主となり、且、これら諸國の土地産物が手に入るのみならず、又その産物からの産物を、歐羅巴人に賣る事が出来るであらう。商業上の利益は我國の手工業から得る利益と相合して、我々の競争者の利益を犠牲にし、不斷に、我々の財富を増加するであらう。……かくして……我々は、彼等を納貢者とするであらう。我々は、彼等を滅亡せしめるであらう、我々は、彼等を征服するであらう。」

サン・シモンによると、フランス革命は、封建制度の中に蠢動することから、彼女を救ひ、革命後は、亦、ナポレオンが出て、イギリスの武力に對抗して彼女の野心を抑壓し得たのである。(Saint-Simon, op. cit. vol. I, pp. 257-258)

五

サン・シモンは、新文化の指導原理を萬有引力の觀念に求めた。が其前に先づ、神なるものの從來の定義に批評を試みた。

從來、形而上學者が神に與へて居る定義を總括すると、「神は精神的存在である、神は永久に不變であり無限である。神は最高の立場から豫見する。神はすべてであつて、すべてを支配する」云々となる。

彼は、かかる神を微塵に碎いた。

然し、この定義に云ふが如く、神は純粹に精神的存在であるとするならば、その存在は思惟でなければならぬ。然るに、同様に定義の示す如く、若し、神が一切を見徹すと云ふすぐれた睿智を有するものであるなら、神は一度しか考慮する必要はない筈である。たゞ一度の考慮によつて、起り得べき一切を豫見しうるとすれば、神は、その一度の考慮を行ふ時迄しか存在の必要がなくなる。一步譲つて神が存在するとしても、世界が完全な睿智で創造されたものであるなら、世界は存続する限りは、完全である様に造られて居る筈である。従つて、特別に、神の支配下にある必要はない。

更に、他の方面から論じて行けば、神は、統一性すら持たないと云ふ事が出来る。何んとなれば、世人は、普通、宇宙は物質と精神とから成るものと前提を置いてゐる。精神的存在である神は物質でない。精神と物質の兩性質を具備した者でなければ、物心兩界に君臨し得やうとは想像出来ぬからである(註一)。

かく論じて來ると、從來の神の觀念は、論理の前に支離滅裂となつて了ふ。彼は、從來のものに代る新らしき宗教原理、或は、社會原理を、萬有引力の上にて、換言すれば、科學の上に基礎づけやうと試みた。

ニュートンは、萬有引力の法則を發見した。然し、これは、もつと精確に、且歴史的に云へば、「ニュートンの萬有引力は、其實、コペルニクス、ケプラー、ガリレオ、及デカルトの四人で思想の要約にすぎない」と云はねばならぬ(註三)。ここにも、我々は、サン・シモンの史の見解の一斷片を窺知する事が出来る。

彼が、引力を中心とする新宗教に與へた名稱は、Physiocratie、之を譯せば、物理主義とも云ふべきであらうか？ 然し、この新宗教は既に確立されたのではない。發見された萬有引力は、未だ、直ちに實用化する丈に完成されてゐないから、我々は先づ、これを完全なるものに造上げなければならぬのである。

物理學體系の進歩は、成程、學者をして、自然神教信者たるの態度を減少せしめた。然し、在來の神に對する彼等の熱は、全然、消滅した所迄は行つて居らぬ。それに、「代りの家が建築された後に、初めて古い家を立去る」と云ふのは、普通、理智ある人間の道程である。我々が、新文化期を迎へるには、次の三條件を遂行しなければならぬ。

第一、物理學體系の基礎となり得る簡單な一觀念を發見する事、

第二、發見された觀念、事實、或は、原理の確實なる事を實證する事、

第三、發見された觀念、事實、或は、原理を、第二次的普遍性を有する觀念、事實或は原理と結合さす事(註三)。

第一の條件は、既に、完成された。ニュートンの發見した萬有引力がそれである。然しニュートンは、この現象から、月を除外した。そこで、ラグランジュ、及ラプラス兩氏は、月に關する研究によつて、萬有引力は除外例なく一切の現象に作用してゐることを證明した。第二の條件はこれに遂行された、現今殘されてゐるのは第三の條件の遂行である。第三の條件とは、萬有引力の觀念を人間社會に適用する事である。この條件が、満足に遂行された際には、初めて、人類の科學が完成される時が到來するのである。

故に、もつと具體的に云へばこの第三條件を遂行するには、人類の科學を實證化しなければならなかつたのである。

然らば、問題は自ら決る。我々の述べるべき事は、人類の科學とは何か？ 人類の科學の現状はどうであるか？ 又、人類の科學の將來はどうであらうか？ と云ふ數個の疑問への解答であればいいのである。

サン・シモンによると、彼の所謂、人類の科學は、甚だ廣い領域を有するものであつた。彼は、又、人類の科學と同意義に於て、有機體生理學と云ふ言葉を使用してゐる。前者よりも、この言葉の方が、我々の斯學に對する觀念を、より明確に且や、限定された領域に於て、我々に與へるが、それでも、尙注意しなければならぬ事は、サン・シモンは、生理學と云ふ言葉に普通の學者が與へてゐる様な非常に限定された意味よりは遙かに廣い内容を與へて居つたと云ふ事である。

要之、人類の科學と云ふ名辭にサン・シモンが與へた意味は、宇宙の科學に對する人類の科學、又、無機體生理學に對する有機體生理學と云ふ様な甚だ廣い對立的の意味であつて、地球上に生存

する至有機體に關する、其中でも、特に人類に重要性を置いた、科學と云ふ内容を有するものと解さねばならぬ。

次に、人類の科學の現状はどうであるか。科學は、すべて、始は推測的のものであつた。科學は、其起つた當時に於ては、僅かの觀察材料しかなかつたため、しかも、其觀察事實が、臆測から生じた事實であるがために、當然そうならなければならなかつた。然し、經驗と觀察が増加するに従つて、又當然、科學は實證化する運命にあつた。そして、其順序は、簡単な科學から漸次複雑したものに及ぶと云ふ経路をとつた。天文學から化學と云ふ順序によつて、現在實證化するべきものは生理學であつた(註四)。

しかも、其基礎となるべきニュートンの発見は Cavendish 實驗によつて、天體物理學に於けると同様、地球物理學に於ても眞理であると云ふ事が證明され、世人によつて萬有引力と云ふ名稱を與へられた。化學者も、初めは、化學的結合が引力の結果であると云ふ事を公言するのを厭つて居つたが、遂に、Berthollet が、化合現象は引力の結果であると云ふ事を認定した(註五)。

たゞ、一〇、生理學者自身が、無機體を支配する引力が、有機體をも支配すると云ふ事を明白に認めて居らぬがために、生理學は、實證化すべくして、實證化されないうで残つてゐる、と云ふのが人類の科學の現状である。故に生理學を實證化するには、

「集塊の運動を制規し、無機體の構成を統治するものは引力であるが、生活現象を支配するものは引力ではない。引力は、決して、有機體構成の原因ではない。生活力は、自然のこの偉大なる力と争つてゐる。そして、引力が彼に打勝つた時には、生命が絶える。その時には、有機體は分解してその要素は、新らしい物體の構成に入りこむ」(註六)と云ふ、在來の生理學者の見解から一歩踏み出し、さへすれば、そののである。

サン・シモンによれば、人類の科學に關して、最も著名な研究は、Vicq-d'Azyr, Calanis, Bichat 及 Condorcet の四人のものであつた。

これら四人の著作には、

一、これら四人は、他の觀察科學に使用する方法によつて、人類の科學を取扱ひ、斯學に甚だ重要な進歩を與へた。

二、斯學に關する重要問題は、すべて、これらの四人の著者の中の誰れか一人によつて、取扱はれて居ると云ふ、二つの特長がある。故に、今後、生理學(人類の科學)にとつて與へらるべき最も重要な進歩は、これら四人の著作を、統一完成すると云ふ一事しか残されて居らぬ(註七)。

サン・シモンは、人類の科學の現状はかくの如くであると解して、四人の學者が與へた材料を綜合完成しやうと努力したのであるが、四人の中で、彼が、最も負ふ所の太なるものは、Vicq-d'Azyr と Condorcet の二人であつた(註八)。サン・シモンは、人類科學完成の目的を達成するため、證明すべき發展階梯を組立てて居る。

第一階梯、無機體と有機體の構造の比較。

この比較から、兩者の活動の結果は、その構造の完全程度に比例してゐると云ふ證明をする。

第二階梯、有機化の程度による有機體の比較。

この比較から、第一に、人間は最も完全に組織されて居る事、第二に、動物も組織が完成するに従つて、いよいよ智的になると云ふ證明が生ずる。

第三階梯、各時代に於ける動物の知識の比較。

この結果は、人間が完成する能力を持つてゐる動物であると信ずるのは、哲學者の僻見であると云ふ證明を生じ。

第四階梯、各時代の人智の比較。

この結果は、人智は不斷に進歩して、決して退歩せぬと云ふ事になる。

第五階梯、十五世紀から今日までの主要なる科學的政治的事件の表(註九)。

「人類の科學に關する覺書」は、以上の五階段説を説明し、組織づけるがために書かれたものであつた。そして、私が、歴史哲學と云ふ項目の下で論述した彼の歴史體系は、この五階梯を研究綜合した結果に外ならなかつた。

但し、彼は第五階梯の年代表を作成する事を、三つの理由を擧げて放棄してゐるが(註十)、それに代るものと覺しさもものを、生理學者宛の公開状の中に述べてゐる。曰く、

「科學的革命と政治的革命とは交替するものである事、後者は常に前者に應じて起り、順次に、引續いて原因となり又結果となつて居つたといふ事」は、十五世紀以來の歴史に於て證明出来ること(註十一)。

次いで、最近の政治的革命は、フランス革命となつて現れた、來るべき革命は科學的革命でなければならぬと推定して、愈々人類の科學の完成の必要を確認してゐる。

註一 Saint-Simon, op. cit. vol. I, p. 218.

註二 Saint-Simon, op. cit. vol. II, p. 221.

註三 Saint-Simon, op. cit. vol. I, p. 229; vol. p. 201.

註四 サン・シモンは「この點については Bardin 博士が負つてゐるが、多し。(cf. Weill, Saint-Simon et son oeuvre, p.

57. Note 2)

註五 サン・シモンは「この理由に於て」 Bachellet 著 *Satique chimique* は「フランスに最も多くの名譽を與へたる考へ」(Saint-Simon, op. cit. vol. II, p. 160)

註六 Saint-Simon, op. cit. vol. II, p. 159.

註七 Saint-Simon, op. cit. vol. II, p. 17; p. 22, p. 98.

註八 サン・シモンは「人類科學の覺書」の第一篇に、ツイク、ダアジールの著作研究と云ふ題名を與へた。カバニー、ピイシヤの研究は、二つとも勝れたものではあつたが、人類の科學に關しては特殊問題しか解決して居なかつたから、サン・シモンは、特別に、この覺書の一部を削ぎ、兩者の研究に充てる必要はないと考へたに由るのである(p. 128)。自體、生理學の基礎たる解剖學程、人間と非常に近い關係があるものはないのであるが、又、この學程に、人々から輕視されてゐる科學はない。従つて、斯學の研究には、常に大なる困難が横つて居つた。三つの身體が、ミラソンの講堂で解剖されて世界驚異の的となつたのは僅かに十四世紀の初めであつた。「ツイク、ダアジールは、かゝる未開拓の地を耕やして、生理學に貢獻する所莫大であつたにも拘らず、世人は、人類の科學の實證的基礎の建設者と、彼を考へなかつた」と云つて、サン・シモンは歎じてゐる(p. 156)。

第二篇は、専ら、ロムドルゼーについて書かれた。サン・シモンは、細微の點については、大いにロムドルゼーを批判しやうと考へて居たが、それでも尙、彼が、ロムドルゼーに據つたのは、この著者の思想には、賞讃すべき崇高なものがあつたからである。

註九 Saint-Simon, op. cit. vol. II, pp. 144-146, pp. 32-34. この階梯説は、Burdin 博士と負ふものである。

註十 Saint-Simon, op. cit. vol. II, p. 155-156.

註十一 Saint-Simon, op. cit. vol. II, p. 148. この思想は「科學序論」中に、既に、其萌芽を示してゐる (Ibid. vol. I, p. 207)。

六

一般科學 (Science général) は個別科學 (Science Particulieres) を要素とするものである。故に、前者の實證化の程度は、後者の實證化如何によつて定まる。若し、個別科學の一部が實證的となつても、同時に、他の個別科學が假說的である場合には、一般科學は半假說的、半實證的である筈である。個別科學が、全部、實證的である時には、一般科學も全く實證的となる筈である (註一)。今、前述した如き道程をとつて最後の個別科學たる生理學が、實證化された場合には、こゝに初めて、一般科學、或は、人格の科學が完成される譯である。

サン・シモンは、生理學が實證化された結果として次の如き諸結果が生ずるものとした。

一、生理學は、公民教育の中に加へられるだらう、

一、道徳は、實證科學となるであらう、

一、政治は、實證科學(衛生學)となるであらう。

一、宗教體系は完成されるであらう。

一、僧侶の組織は改造され、且其制度も改められるであらう(註二)。

これら生理學の公民教育参加、研究團體の新組織、新宗教原理、或は道徳原理、及、僧侶の新職務等について、サン・シモンの抱懐する所を述べて見やう。

十五世紀に於ける公民教育は、殆んど全く、神學であつた。キリスト教樹立以來、世人の受けた最初の教育は宗教教育であつた。この教育の教ふる所は世界は人間のためにつくられた、人間は神の思ふがまゝにつくられたと云ふ信念の確立であつた。このために、學者は、人間の次には、人間に最もよく似たものを排列しなければならぬと云ふ誤つた信念を抱き、智能の勝れた象や海狸を捨てて、彼等より劣つた猿を人間の直後に置いた。

ルーターの改革からルイ十四世の盛代に至る間は、グreek、ラテンの研究が、公民教育の中に輸致された。然し、この研究は、神學の領域に浸入するや否や、排他的のものとなつて、僧侶を志す者のみが出入し、世人が呼んで神學校とした特殊學校の占有する所となつた。

ルイ十四世の治世には、物理學及數學が、公民教育の中に加へられた。そして、ルイ十六世の治世には、既に、重要な役目を務めるに至つて居つた。

今日では、前記の科學は、教育の必須的部分を構成して居る。舊社會に於ては、高等の教育を受けたかどうかと云ふ標に、世人は、彼は、ギリシヤ語やラテン語を知つてゐるか?と尋ねたもので

あつたが、今日では、彼は、數學がよく出来るか？ 物理學、化學、自然史について知つてゐるか、一言で云へば、實證科學、或は觀察科學の知識を有してゐるか？ と云ふ問を發する様になつてゐる。

この相違は、公民教育に於てのみ止まらぬ。同時に、教化及研究團體たる學者及僧侶の中に、當然に、起るべき變化を伴つた。新宗教團體の構成がそれである。

サン・シモンは、科學體系を二部分に分つた。一つは受働的部分であり、他は能動的部分である。この區別は、寧ろ、理論的部分と實際的部分と云つた方がいいかもしれぬ。前者は、原理の整理を目的とし、後者は、原理の適用を目的とする。

この區別は、單なる分類でなくて、原理研究と原理教授の重要な二分分類を示すものである。サン・シモンの要求する學者團體の組織は、この區別によつて、明白な二部分より成るべきであるとされてゐる。即ち、一は大學であつて、既得智識の教授に従ひ、他は學士院であつて、科學體系の完成に努力する。勿論、この兩者は、相互に孤立して聯絡のないものであつてはならない。相互に依存し、渾然たる一大精神原動力とならねばならないのである。

學士院は、更に、二部分に分かれる。第一部會は、有機體の研究に専心する人より成り、第二部會は、無機體研究に従事する人より成る。この二つの部會は、各自其取締に任じ、各自に集會を催す。前者に於ては、生理學者が、小世界(地球)を研究し、後者に於ては、地理學者が大世界(宇宙)を研究する。これら二部會の上に位し、彼等が研究した理論を結合して、一大總論を形成する任に當る上級部會が、更に設けられる。この高級部會の會員は、前記の二部會員の中から選舉によつて選ばれるのである(註三)。以上が、新しい研究團體の組織である。

かくして、大學は、専ら、公民教育として彼等の研究した結果を、民衆に教授する機關となるのであるが、從來の僧侶の如く、實證科學の研究を等閑に附して居つたものには、到底、かくの如き大學の職責を果す能力はないと見なければならぬ。従つて、當然僧侶は、かかる使命を完全に果たすために改造される運命を免がれない、寧ろそれよりは、「著名の學者は、悉く、僧侶の一員となるであらう」と云つた方が適切である(註四)。

博學なる哲學者は、僧侶に、無智なるものの代名詞たる僧侶に代つて、宗教を説き、道德を教へ、政治を司り、實際上に於ても、實證科學の効果を實現しなければならぬ。サン・シモンは、科學者が僧侶たる資格に、最も適し、且、この新僧侶が如何に有用なるかを説明してゐる。

Alexandre-Fornèse は、「卑怯な兵士と無智な僧侶以上は、度し難いものを知らぬ」と云つてゐるが、これは誠に至言である。

僧侶が、社會に有用なるためには、勿論、博學でなければならぬ。博學であつてこそ、尊敬を受けるのである。學者は、この點に於て、充分の資格を有してゐる。又、僧侶の資格は、博學であるといふ丈では不充分である、品行方正が必要である。然し、この點に於ても學者は充分の資格を享有してゐる。何故かと云ふに、彼等の目的及興味は、科學の發展その者であつて、決して、金錢的、物質的幸福でないからである。

今、俗人の數學者や物理學者に、司祭の地位を譲つたとすると、この新司祭は甚だしく有用なものである事が發見される。即ち、この主任司祭の幾何學的智識は、土地に争が起れば、幾何學を應用した科學的に公平な土地測量によつて之を鎮める。又、彼の物理學的智識は、雲に電氣が満ちてゐる間は人が鐘を鳴らすことを禁ずる。又井戸を浚渫しやうとする時、彼は其空氣が疑はしいと思へば、そこ個人を下ろす前に、點火した蠟燭を下ろして調べる。尙、生理學の智識も、國民の衛生に貢獻する所が多いであらう(註五)。

然らば、科學者によつて教えらるべき新道德原理とは如何なるものであるか？

從來の道德原理とは、頗る異つたものでなければならぬ。從來、提唱されて來た福音書の道德原理たる、「汝の欲せざるところ人に施す事なかれ」と云ふ原理は、第一に、消極的であり、單に、間接的義務しか人に課さない。第二に、社會の中で生活しない個人には、實施の途がない。

サン・シモンは、學者が新時代に提唱すべき甚だ快活な原理を掲げた。曰く

「人は働かざるべからず」。

これこそ、勞働の萬有引力的法則化である。實に、勞働は、精神的幸福の源泉である。勞働するものこそ最も幸福なる人である。幸福なる家族、幸福なる國民、幸福なる人類とは、全員こぞつて各自の時間を有益に使用し、働かざる人の最も少ない家族、國民、及人類の稱である。

但し、この原則は、

「立法者は、所有權の自由行使を保證しなければならぬ」。

一、道德家は、遊惰なる有産者から一切の尊敬を奪取して彼等を罰する様に、輿論を進めるべきである、と云ふ二つの附帶事項の補助によつて、初めて、完全なものとなる事に注意しなければならぬ。何んとなれば、所有權の自由行使は、勞働の成果の自由所分と享樂を意味し、又有閑者の所罰は、社會的係累を最大限に少からしめ、全體の勞働能力を増進する事を意味するからである(註六)。

サン・シモンによれば、僧侶が失墜した名聲を再び上ぐるものはこの原則以外にはなかつた。

物理學に於ける萬有引力を相對して、道德界に勞働を發見した新任僧侶が、かくの如き積極的な教理を説くならば、僧侶の亡失した勢力は忽ち回復されること疑なしである。

而して、尙進んでは、歐洲大陸征服の野心を持つ國民に對抗して、平和を確保すると云ふ僧侶の本分に立戻する事が出来る。僧侶は、かくして、「精神的權力と俗世的權力の最もよく平均した人類にとつて最も幸福な時代、特に、歐洲社會の如く、多數國民より成る政治社會に必要なこの平均」を維持する唯一の統一的勢力となるであらう(註七)。

註一 Saint-Simon, op. cit. vol. II, p. 15.

註二 Saint-Simon, op. cit. vol. II, pp. 20-25.

註三 Saint-Simon, op. cit. vol. II, p. 26; cf. pp. 191-192.

註四 Saint-Simon, op. cit. vol. II, p. 247.

註五 Saint-Simon, op. cit. vol. I, pp. 225-226.

註六 Saint-Simon, op. cit. vol. I, p. 221.

註七 Saint-Simon, op. cit. vol. II, p. 27.

七

人類の科學を完成して、理論の頂上を極めた、少くとも彼自らそう信じて居つたサン・シモンは、この高い地位から實際社會を俯瞰した。心中に、自己の體系を適用すべき曠野を求めながら、サン・シモンの眼前に展開されたものは歐洲社會の現状であつた。彼は、こゝに彼の活動すべき地を見出して、理論の高所から飛下りたのである。

サン・シモンは、「人類の科學に關する覺書」を次の如き句で結んだ

「十八世紀の著作と十九世紀の著作との間には、前者は、全く破壊に導く傾向を持ち、後者は、全く社會改造を招來する傾向を持つといふ顯著な相違が存する。

あらゆる方面の豫見的智慧を同時に包有する廣大なる才を有する皇帝には、早くからこの形勢を察して、一つの疑問を學士院へ提出した。

諸科學の進歩を促進する方法如何？

此の疑問は分解すれば、次の如き問題を包有してゐる

歐洲の平和を樹立する方法如何？

歐洲諸國民の全體社會を改造して、人類の運命を改良する方法如何？(註一)。

科學から政治への轉換の一步はこゝに萌出てゐる。

サン・シモンの研究は、ナポレオンが提出した大問題に對する、生涯を捧げた計畫的のものであつた。彼は、先づ、「十九世紀科學研究序論」を書いて、新百科全書稿本たらしめやうとした。次いで、

一八一三年には前述の「人類科學に關する覺書」を完成して、略々、科學體系を形成させたのであるが、彼は、この時既に、一八二五年迄の彼の研究の計畫をつくつて居つた。即ち、一八一三年には人類科學の覺書を書き、一八一六年一月一日からは、哲學に關する覺書を書き、一八二二年の一月一日からは、僧侶の改造に關する覺書を書き、一八二五年の一月一日からは、諸國民の國民的改造に關する覺書を書かうと決心して居つた(註二)。

サン・シモンは、實際に、この計畫通りには、筆を續けては居らぬが、一八二五年彼の死と、この計畫の最後の年が、偶然に一致してゐるのは、そこに何等か彼の靈感が働いたものと見る事も出来る。

サン・シモンは、常に社會の冷眼を浴びた。その書く所のものの社會に對する反響も、又、甚だ僅かであつた。然し、彼は、永久に理想の人、情熱の人であつた。人の胸中に鬱勃たるものを破つて、彼の理想が湧出する時、人は胸の血潮の高鳴るのを聞く、理想は常に若く又常に大膽である。理想が、我々の人生に或る輝しさを與へるのはこのためである。サン・シモンは常にかゝる歡喜を味つた人であつた。彼が、屈せず社會に呼びかけ、社會の協同を求め、報ひられる所がなかつたに拘らず、反つて、その信念を固め、遂には、歐洲の平和に言及してゐるのを、我々は「人類の科學に關する覺書」のそこゝに發見する事が出来る。曰く

人類の科學に關する覺書の如きは、諸學者の忠告を要求する一草案にすぎぬ。

余は、かくの如き困難なる研究を完成しうる能力を自信して、著述をしてゐるのではない。否寧

ろ、社會が、それに對してより大なる欲求を有してゐると信するからである。余は、この計畫を實行するには、自分よりも遙かに勝れた人の存在してゐる事を信じてゐる。余はよろこんでその人達の指導を歓迎する。

余が、その人達に劣つてゐる事を發見した時こそ、反つて、余の生涯中最も幸福なる時であらう。この研究は、單獨の勞力では不可能である。生理學者と哲學者の協同の結果でなければならぬ。生理學者諸君の協力がなければ、余一人では到底成功しない。若しも、諸君にして率直に余を援助せらるゝならば、余は、幾年ならずして、一夫有用な科學的革命を起すであらうと(註三)。

然るに、サン・シモンが、生理學者から受取つた「懇切な手紙」は何れも、重要な點について何事も教示してゐなかつた。つまり、彼は、體よく拒絶されたのである。然も尚、彼は、生理學者宛の第二の手紙に於て次の如く述べてゐる。

「卿等のこの暗黙の拒絶は、余を、甚だ悲しい孤立に遺した。そして、この問題について、甚だ真面目な反省をなさしめた。

「卿等よ、哲學者が、生理學者の救助なくして哲學に満足な體系を與へ得ない事は確な事實である。然し、生理學者が、哲學者の援助なくして、生理學を合理的に基礎づける事の出來ないのも亦等しく確實である。

若し、生理學者と物理學者とが、今日、率直に彼等の努力を統合しやうと希望するならば、彼等は、一切の政治問題を衛生學の研究に導くに到るであらうといふ事も亦、確實である。」

最後に、彼は、歐洲を平和にしやうといふ感情、歐洲の社會を改造しやうと云ふ考へしか有して居らぬ。卿等も、その心をこの高い感情に迄揚げよ。卿等の勇氣をこの偉大なる考へにまで揚げよ。打明けて、我々の努力を結合しやう。そうすれば、短時日で、我々は他人の幸福に對して又我々と個人の満足に對して最も有用な事をなすに至るであらうと云ふ社會大激勵の言葉を述べた(註四)。

この言葉こそ、彼が、科學から政治への進歩を意味して居つた。續「萬有引力に關する研究」には、彼の科學思想の要約と同時に、果してや、發展した歐洲平和の對策が含まれて居た。

此著に現れたサン・シモンの政治思想を、少しく述べて、此著が、彼の科學から政治への一大轉期の著である事を示さう。彼は歐洲の平和のために思慮を廻ぐらした。然し、彼の考慮は、ナポレオンを擁するフランスを中心として、否、もつと的確に云へば、ナポレオン自身を中心として廻らされて居つた。彼が、最初には如何にナポレオンに期待するところが多かつたかは、「一兆ネーグ住民の書翰」から「萬有引力に關する研究」迄の著作をよめば容易に知る事が出来る。

此事は暫時さておくとして、サン・シモンによれば、一國民が、第一の國民として公平なる史家の筆で、決定的に分類せられるためには、他の一切の國民から二つの點で超越してゐる必要があつた。この二點とは、軍事的優越と科學的優越とである(註五)。

この二點に於て、フランスを考察して見やう。第一の點、即ち、軍事的優越に於ては、フランスは決して他に遜色を見せぬ。萬人の疑はぬ所である。然し、第三の點に於ては、フランスが甚だし

く劣等の地位にあることは、蔽ひかくす餘地がない。何んとなれば、哲學に於て、フランス學派の後援者はピエムである。無機體物理學に於て、フランス人の指導者はニールトンである、又、人類の科學に關して、フランス人が、吃々として語る僅少の言葉も、ロックたよつて教示されたものである。この三人は、すべて、英國人であつた。

我々が、フランスに於て卓越せる學者と稱する者は、結局は、以上三人の大思想家の云ふ所の註釋者にすぎぬ。

サン・シモンは、以上の見解に附言して「英國心酔者でない、あるがまゝに事物を見たのだ」と云つてゐる。

然し、幸に、フランスは軍事的優越を所有してゐる。これは科學的優越を附加せば、フランスは完成されるのである。今、歐洲に於て、フランスの好敵手たるものは、英國のみである。英國は、其制海權を利用した商權獨占と、科學的優越の二つによつて、フランスを併呑しやうとしてゐる。然し、ナポレオンは、かゝる英國の野心を抑へて、全歐洲の平和を維持してゐる。そしてその爲に流血の不幸が漲つてゐる。これが、歐洲の現狀である。

歐洲社會の平和の爲に何事か要求されてゐる。しかも、現在歐洲各國の内閣は、かゝる事態に對して全く無力であり、現在の不幸を匡正する些少の方法すら提出し得ない有様である(註六)。

この事實よりして、サン・シモンは、ナポレオンの英才を、軍事方面よりも寧ろ、現狀を利用した政治的統一事業に傾注すべき時機到れりと考へたのである。

然るに、英明なるナポレオン自身も、よくかゝる事態を洞察して、科學體系の樹立に努力を惜まぬ様子を示した。サン・シモンが、「十九世紀科學研究序論」を書いたのは、皇帝のかゝる態度に對して返答するためであつたと云ふ事は彼自身の記する所である。

「ペーロンをして再生せしめたらば、かく云ふであらうと云ふ假定に言よせて、サン・シモンは、皇帝に對つて次の如く獻言した。

「陛下の軍隊は、Cadix からモスコトまで、ハンブルヒから伊太利の末端まで、全大陸を蹂躪した。かくして、陛下の軍事的榮光は、その頂點を極めた。陛下の帝政の盛んなる事は史上未だ見ざるどころである。陛下は、年齢に於ては成熟された。従つて、陛下の治世も、生命のこの期の普通の屬性である辯論と堅實の性格をとらねばならぬ。」

然らば、其典型は何れに求むるか?

サン・シモンは、その典型を彼の愛すべき祖先たるシャールマンにとつて示した。

「陛下は、軍事方面に於てシャールマンを典型とされた。陛下は彼を凌駕する所大であつた。然し、シャールマンは、只に、軍事的であつたに止まらぬ。彼は、亦、政治的に卓越して居つた。……彼は、歐洲が生んだ最大の政治家であつた。……彼は、歐洲社會の意義ある組織者であつた。」

「シャールマンは、甚だ差違の鮮明な風俗、根本的に異なる言語を有し、自然の障害によつて隔たり、異なる氣候風土に住み、同一の食物を執らぬ多數國から成つてゐる世界の一部及其接續島嶼の莫大なる人口は、同一の政府の下に生活する事の不可能なのを知つた。彼は、同様に、若し、全體

に共通な思想によつて結合されてゐなかつたら、)をして若し、最も博學な人々から成つてゐる一體が、國民によつて共同の利益をもたらず目的に、普遍的原理を適用する責に任じなかつたら、土地の隣接したこれら多數の國民は、必ず、繼續した争闘の状態にあるたらしと云ふ事を察知した。

彼は、宗教に於て、この政治的統一の紐帶を發見した。山會の思想は、（註七）「彼は、宗教が歐洲の全國民に共通でなければならぬといふ事を感知した。彼は、宗教と僧侶の首長達を獨立させ、従つて、一切の國家政府の直接支配からそれを除外しなければならぬといふ事を察知した」（註七）。

ジャコブ・レマンが、ローマに法權を樹立したのはこのためであつた。この法權は、然し、八世紀から十五世紀迄は完全に其使命を果したが、十五世紀から次第に緩みを生じた。そして、ナポレオンの時代に至つて完全に無用のものとなつた。命や、新法權の樹立が、生理學の實證化によつて行はれんとしてゐる。生理學が、公民教育に加入させられて、科學者が僧侶の職を襲はんとしてゐる。皇帝は、新宗教フイデジズムを樹立すべき運命にある。皇帝は、先づ、英國人の專制を矯めんとした。此意志表示はよかつた。然し、彼はその手段に於て方向を誤つて居つた。彼は、英國人の專制を抑止しやうと云ふ彼の計畫の實行を、歐洲大陸の諸國に對してその兵力によつて強制しやうと試みたからだ。一部の人々は、これを是認するかもしれない。然し、強制は正しくない、第一に、彼自身が、既にこの方法によつては實行不可能であるのを露國遠征によりて經驗して居たし、又、全階級をこめた同胞が、フランスは、自然によつて興へられた、ピレネー、アルプス及ラインの三境界の中に安息すべきである、と云ふ希望を明言してゐるからである（註八）。

加之、前述した如く、智識を中心とする歴史は、我々に、三十歳から四十歳迄の年齢は、人類に於ても個人に於ても、闘争を廢して安息に入るべき時である事、及、來るべき世紀の革命は、科學的革命たらざるべからざる事を教えた。

若し、ナポレオンにして、かゝる史實を無視して、征服手段をとるなら、ルーターの拙策が歐洲聯盟に與へた間隙に乗じやうとする英國の野心を抑止した彼の功績から地を掃ふであらう。

要之、サン・シモンは、彼の觀念史觀の當然の歸結として、ナポレオンに智の完成を要求したのであつた、劍の榮光を要求しなかつた。換言すれば、新歐洲出現のための歐洲學者の大同團結こそ、サン・シモンの求めて止まぬものであつたのだ。彼曰く

「文化の狀態に應じた學説が定るや否や、一切は秩序を回復するであらう。歐洲諸國民に共通な制度は、自ら、樹立されるであらう。そして、既得の知識に應じた教育を授ける僧侶は、國民や王の大望を制禦して、速かに歐洲を平和に戻すであらう」この結果、歐洲の學者の勢力は不可測のものとなるであらう、そして、この制度は、除外例なく、各國民に適用されるであらう、たとへ、フランスであつても、若し、彼女がその限界を越へる時は、この制度は、容赦なく、其全威力をフランスに對して發揮するであらう（註九）。

これこそ、「萬有引力に關する研究」の結論であつた。

そして、かく推究し來たつたサン・シモンは、遂に、具體的の提案さへ、ナポレオンに提出したのである。この提案は、「萬有引力に關する研究」の序文の前に置かれてある。そして、この提案では、彼は、恐ろしく大膽であり且、驚く程、實際的である。その大膽さは、ボナパルトをして、この著者の身元調をやらせたといふ程である。

彼の計畫は六ヶ條より成つてゐる。

一、歐洲社會の改造に關する最良策の著者に二千五百萬法の償金を與へる事、

この問題の解決に、莫大な金は必要でないが、輿論を湧かせ、社會全體の注意を引きつけるには、以上の如き金額も必要としなければならぬ。

二、覺書應募の資格には國籍の區別なし、

三、此覺書は翌年(一八一四)十二月一日迄に提出すべき事、

四、此覺書は三通提出の事、一はナポレオンへ、一は奧國皇帝へ、一は英國の攝政に手交さるゝ事、

五、審査に際しては、兩者を招待する事、但し、兩者が之れを拒絶したる場合には、ナポレオン一人でこれを決定する事、

六、一八一五年一月一日に償金受取者の名を發表する事、

以上は、計畫の條件であるが、この計畫の重要性は、この計畫自體よりも寧ろ、その附帶條項の中にあつた。即ち、サン・シモンは、英國人をして大陸諸國民の獨立を認めさせるために、ナポレオンに次の如き要求を出した。

「大陸の諸國民は、イギリス人をして國旗の獨立を認めさせるために、彼等の努力を結合しなければならぬと云ふ點に一致するだらう。然し、他の一點に於ては、もつと積極的に一致するであらう。陛下は、ライン同盟の保護者たる地位を放棄すべき事、陛下は伊太利を明渡すべき事、陛下は和蘭を自由にすべき事、陛下はスペインに干渉する事を止める事、一言にして云へば、陛下は自己の國家的領域に止まるべき事、これである」(註十)。

イギリス人をして、海洋の自由を承認せしめるには、先づ與へなければならぬ。若し陛下にして、集め得た幾多の勳功をより以上に増さんとするれば、陛下はフランスを壓殺するであらう、そして、陛下は臣民の意志と眞反對になるであらう」。

サン・シモンのかゝる眞摯な警告には、又、誠實溢るゝ眞情が吐露されて居つた。

余の意志は純である。余は、陛下の名譽と同胞の幸福とを、心から希望する。余の提案した方法は、一見サン・ピエール僧の永久平和の計畫に似た哲學者の夢の如くに見えるが、夢でない事を余は確信する。この著は、陛下が之を讀むを煩しとしなければ、陛下の興味に叛かぬ物である事を進んで言明する。又、陛下以外にこれを判定すべき地位にあるものはない。従つて、陛下にしてこれを讀まないなら、余にとつて之れより大なる不幸はない。

余の目的は、政治に實證的性質を與へることである。余の最大の幸福は、この目的を達成して、陛下の治世の榮光に貢献したいと云ふ事である、云々と。

サン・シモンのナポレオンに對する期待は、これのみに止まらぬ。彼は、自己の空想に畫く「光榮の寺院」の帝座を占むる資格のあるものとしてナポレオンを推薦してゐる。この寺院には二門あつて、其一つである科學門からソクラテス、アリストト、ベーコン、及デカルトの五人が此寺へ入つた。他の一門である英雄門からは、アレキサンダー、アンニバル、シーザー、マホメット、シャレンマンの五人が入つた。然し、史上未だ、同時に二門を潜つて此寺院に入つたものはない。たゞ、ナポレオンのみがこの資格を有して居る(註十一)。

フランスが、科學的並に政治的優越を得て、宇宙王國の覇者となり、ナポレオンがその帝座を占める、如何にも、サン・シモンらしい空想であると云はねばならぬ。

註十一 Saint-Simon, op. cit. vol. II, p. 152.

註十二 Saint-Simon, op. cit. vol. II, p. 11, p. 243.

註十三 Saint-Simon, op. cit. vol. II, 53, 140, 148.

註十四 Saint-Simon, op. cit. vol. II, p. 165-166.

註十五 Saint-Simon, op. cit. vol. II, p. 44.

註十六 Saint-Simon, op. cit. vol. II, p. 190.

註十七 Saint-Simon, op. cit. vol. II, p. 193-194.

註十八 Saint-Simon, op. cit. vol. II, p. 245.

註十九 Saint-Simon, op. cit. vol. II, p. 241, p. 246-247.

註二十 Saint-Simon, op. cit. vol. II, p. 172-173.

註二十一 Saint-Simon, op. cit. vol. I, p. 248.

八

前述の如き、サン・シモンの偉大なる献身的努力は、當時の社會の代表者たるナポレオンに少しも認められなかつた。

ボナパルトは、この哲學者が、他の哲學者の如くに、阿諛の衣服をその勤勞に着せて、彼にそれが見える様はしなかつた爲、サン・シモンによつて與へられた貢献を常に無視して了つた(註一)。

特に、サン・シモンは、「人類科學の覺書」を知名の學者に送るに際して、「余は飢死せんとする」を云ふ極めて悲痛な手紙を添えたのは有名な話である。しかも、この悲痛な手紙すら世人の同情を得るに足らなかつた。

Well の言を引用すれば、「何人が彼を救はんとしたか、我々は之を知らぬ」のである。

結局、サン・シモンは、スタジダールの言葉そのまゝに、「社會は、彼女が目に見る勤勞にしか支拂はない」と云ふ社會心理の犠牲となつたのである。

然し、彼のこの悲痛な叫は、後に於て、サン・シモン派の人々を動かすこと甚だ大なるものがあつたのは、彼の大いに喜ぶべきであらう。即ち、一八五九年に發行されたサン・シモン選集の編者は其序に於て、次の如く述べてゐる。

「我々が、サン・シモンの未刊の諸著及彼の學說を知らしむるに最も適當であると思ふ彼の著作の或物を敢えて公刊する感激は、美しく且悲しくもあるこの言葉を、屋根裏の室に於て一八一〇年に

書いた時のこの大人物に感ずる感激と同一である」と(註二)。

とにかく、歎願はすべて效を奏さず、進退極つた如くに見えたが、其時、サン・シモンは稍々愁眉を開く事が出来た。それは、彼の親族から、相續權と交換に少額の年金を受ける事になつたからである。

かくて、サン・シモンにも、漸く生活の根底が定り初めた。彼は、貧困のどん底から、暫時離れて、ナポレオンの没落によつて起つたフランスの危機を、自由思想として、凝視する事が出来た。オーギュスタン、テュリーとの交渉もこの頃に始つた。

偕で、前述した所のサン・シモンの主要觀念を摘出すれば次の四點になる。

一、完全に知るためには、人間は、單に個人として研究される必要があるばかりでなく、人類全體として研究される必要がある。個人は全體に對して連帶である同様に、人間全體は又時代と連帶關係にある。後者の連帶關係は、發明と言語の使用によつて發展し、これが、人間と他動物との間の著しい相違を惹起す主要な原因となつたのである。

二、人類の行動は、一つの展開方則に服従してゐる。この理によつて、將來の條件は將來にあるのであるが、同時に、それは過去の最も古い條件にも關係してゐるのであるから、我々は、過去の條件を注意深く觀察して、將來の條件をそこから抽出し、豫見する事が出来る。かやうにして、科學、政治、道徳一切を實證化する事が出来る。

三、彼は、生理學と云ふ言葉に、大部分の學者が與へてゐる様な制限された意味より、ずつと廣

い全有機體の科學と云ふ意味を與へて居つた。従つて、人智發展の法則の如きも、動物及植物が發展する最も普遍的な法則の特殊適用にすぎず、又、その普遍的法則自體も萬有引力の法則の一傍系にすぎなかつた。天體の科學と人類の科學の二つを、より高い見地にあつて統治する法則が萬有引力の法則であるからである(註三)。

四、彼は、神なるものを絶対に否認しなかつた。神を以つて統一的法則の原動力と考へて居つたらしい。従つて、彼に於ては、萬有引力の觀念は、神の觀念と決して相反するものではなかつた。萬有引力の法則とは、神が以つて宇宙を支配する永久の法則であつた(註四)。

以上の四點からして、彼は、次の如き最後の結論を、「萬有引力に關する研究」に於て與へた。「萬有引力の觀念は、新哲學の基礎として設定されねばならぬ。そして、歐洲の新政治組織は、この新哲學の一結果でなければならぬ」と。

然し、この著に於ては、科學の根本問題解決後の歸結としてその應用科學たる政治學への進歩の方向を示した丈であつて、サン・シモンは、歐洲新社會の政治組織は如何なるものでなければならぬかと云ふ具體的方面については、少しも言及して居らぬ。

「萬有引力に關する研究」は、科學的著作の最後のものであり、同時に、彼の政治的著作の最初のものであつた(註五)。

結局、進歩の觀念を確實にした事、實證哲學の萌芽を充分に示した事、この二つを、我々は一八一三年に於けるサン・シモンの哲學研究の收穫として認むべきであらう。

註一 M. Leroy, La vie de Comte de Saint-Simon, p. 249-250.

註二 Saint-Simon, op. cit. vol. I, intro v.

註三 Ibid, XLI-XLII.

註四 Saint-Simon, op. cit. vol. II, p. 238.

註五 Saint-Simon, op. cit. vol. I, intro LII.

橋樑「官僚」の社會的意義

小泉 信 三

日本若しくは西歐羅巴の社會を見慣れた目で支那の社會を観察する者に恐らく第一に奇異に感ぜられることは、支那には封建貴族なる階級の存在せぬ一事であらう。尤も封建制度の遺物、又は封建的勢力等の語は、今日の支那社會に就いても屢々用ゐられて居り、殊に共產黨の文獻には此種の文字を見ることが多い。併し所謂「封建」は大概は軍閥を指す場合の形容詞たるものゝ如く見える。併し今日の支那軍閥は嚴格な意味での封建諸侯若しくは其後裔ではない。軍閥はたゞ兵權と共に政權を掌握する軍人群である。其首領はよし綠林出身ならぬ迄も、概ね下級將校から立身し、其才幹と機會と縁故とに由り其勢力の大を致したものであつて、英國、蘇國の世襲貴族又は東部普魯西に於けるエンケルの如きものは、支那で見ることが出来ぬやうである。然らば支那社會には名門名族といふものはないかといふと、それはある。而してそれは官吏若しくは昔で官吏たりしものゝ形づくる集群である(らしい)。然らば官吏となる者は誰であるかといふに、それが國家試験の合格者であるのは不思議でないが、其試験科目が法律學經濟學でなくて、進士たり舉人たるものは其の古典文學の素養を試みられるといふのは、西洋人には異様の感に堪へぬ所であらう。此の詩文の技倆に依りて官吏の資格が取得されるといふ事實と、「好鐵不打釘。好人不打兵」なる諺にも見らるゝ如く兵士が人に賤しめられるといふ事實とは、支那社會の特色を見る上に於ての一の重要な鍵となるもの如く考へられる。而して此等の諸點を考察すると必ず逢着しなければならぬのは、支那に於ける